

領域略称名：古代アメリカ文明
領域番号：1601

平成28年度科学研究費補助金「新学術領域研究
(研究領域提案型)」に係る中間評価報告書

「古代アメリカの比較文明論」

(領域設定期間)

平成26年度～平成30年度

平成28年6月

領域代表者 (茨城大学・人文学部・教授・青山 和夫)

目 次

研究領域全体に係る事項

1. 研究領域の目的及び概要	3
2. 研究の進展状況	5
3. 審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況	8
4. 主な研究成果（発明及び特許を含む）	10
5. 研究成果の公表の状況（主な論文等一覧、ホームページ、公開発表等）	13
6. 研究組織（公募研究を含む）と各研究項目の連携状況	18
7. 若手研究者の育成に関する取組状況	20
8. 研究費の使用状況（設備の有効活用、研究費の効果的使用を含む）	21
9. 総括班評価者による評価	22
10. 今後の研究領域の推進方策	24

研究組織 (総括：総括班，支援：国際活動支援班，計画：総括班及び国際活動支援班以外の計画研究，公募：公募研究)

研究項目	課題番号 研究課題名	研究期間	代表者氏名	所属機関・部局・職	構成員数
X00 総括	26101001 古代アメリカの比較文明論	平成26年度～ 平成30年度	青山 和夫	茨城大学・人文学部・教授	4
Y00 支援	15K21760 古代アメリカの比較文明論	平成27年度～ 平成30年度	青山 和夫	茨城大学・人文学部・教授	8
A01 計画	26101002 古代アメリカ文明の高精度 編年体系の確立と環境史復 元	平成26年度～ 平成30年度	米延 仁志	鳴門教育大学・大学院学校教育研究 科・教授	7
A02 計画	26101003 メソアメリカ比較文明論	平成26年度～ 平成30年度	青山 和夫	茨城大学・人文学部・教授	6
A03 計画	26101004 アンデス比較文明論	平成26年度～ 平成30年度	坂井 正人	山形大学・人文学部・教授	14
A04 計画	26101005 植民地時代から現代の中南 米の先住民文化	平成26年度～ 平成30年度	鈴木 紀	国立民族学博物館・民族文化研究部・ 准教授	9
計画研究 計6件					
A02 公募	15H00714 メソアメリカ文明の高精度 編年体系の確立と巨大噴火 インパクトの広域比較研究	平成27年度～ 平成28年度	伊藤 伸幸	名古屋大学・文学研究科・助教	2
A03 公募	15H00712 ワランゴ樹木年輪の同位体分 析による高精度古環境復元	平成27年度～ 平成28年度	大森 貴之	東京大学・総合研究博物館・研究員	1
A03 公募	15H00713 ペルー、ワヌコ市の遺跡発 掘：神殿の起源を巡る編年研 究と、その成果への現代的関 心	平成27年度～ 平成28年度	鶴見 英成	東京大学・総合研究博物館・助教	1
A04 公募	15H00715 インカ帝国イメージの資源化 と先住民統治：スペイン植民 地期ラプラタ地域を中心に	平成27年度～ 平成28年度	武田 和久	明治大学・政治経済学部・専任講師	1
公募研究 計4件					

研究領域全体に係る事項

1. 研究領域の目的及び概要（2ページ以内）

研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時に記述した内容を簡潔に記述してください。どのような点が「我が国の学術水準の向上・強化につながる研究領域」であるか、研究の学術的背景（応募領域の着想に至った経緯、応募時までの研究成果を進展させる場合にはその内容等）を中心に記述してください。

■研究の学術的背景

メソアメリカとアンデスという、古代アメリカの二大文明を築いたのは、我々日本人と同じモンゴロイドである。古代アメリカの二大文明は、人類が1万数千年前にアメリカ大陸に渡ってから16世紀になるまで、旧大陸の諸文明と交流することなく、アメリカ大陸の内部で独自に興隆した一次文明であった。旧大陸の諸文明が相互に影響しながら展開してきたことを考えると、人類史における古代アメリカの諸文明の特異性は明らかである。一方、アメリカ大陸原産の栽培植物は世界の作物の6割を占めるが、コロンブス以降の西洋では新しい食料源を得て人口が大幅に増加し繁栄を極めた。栽培植物という生活基盤から世界の歴史を変えたのは、古代アメリカ文明である。しかし西洋人の侵略・植民地化によって「敗者」となった古代アメリカの二大文明は、歴史の表舞台から消され、後世に及ぼす影響が過小評価されている。今なお学術研究と一般社会のもつ知識の隔たりは大きい。その一因は、古代アメリカの文化や歴史に関する世界史教科書の記述が、ユーラシア大陸と比べて質量共に極めて貧弱なことである。

「歴史は勝者によって書かれる」としばしば言われるが、本領域研究は、主に「勝者」の西洋人によって理解され、語られてきたメソアメリカ文明とアンデス文明について文系と理系の多様な研究者による新たな視点や手法による共同研究を推進し、古代アメリカの比較文明論の新たな展開を目指す。新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(H21-25年度)では、計画研究A02代表者の青山とA03代表者の坂井は、A01代表者の米延と文理融合の共同研究を展開し、環太平洋という広範な地域の通時的な考古学データと高精度の環境史復元を照らし合わせて、メソアメリカ文明とアンデス文明の盛衰と環境変動の因果関係を明らかにした。この共同研究によって環境変化と文明の盛衰に関する実証的なデータを収集した結果、環境が文明の変動を左右するという説の問題点が浮き彫りになった。A04代表者の鈴木は、1986年からメソアメリカのマヤ先住民に関する文化人類学調査に従事し、人々が過去を参照しながら自己のアイデンティティを確認する現象を研究してきた。本研究は、「環太平洋の環境文明史」の成果を踏まえ更なる発展を目指す。メソアメリカとアンデスの二大文明に地域を絞り、年代軸を格段に精密化して環境と文明の関係を一層詳細に検討し、文明の変動を実証的かつ多面的に検証する。計画研究A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」を加え、古代文明の資源化をキーワードとして、より長い時間軸で文明の動態を探求する。そのために考古学、歴史学、多様な研究対象の文化人類学等の人文科学と自然科学の中堅・若手の研究者を中心にチームを再編成する。

■研究の目的

本領域研究の目的は、①精密な自然科学的年代測定法や古環境復元によって、メソアメリカとアンデスの高精度の編年を確立し環境史を解明する、②精密な編年を基にメソアメリカ文明とアンデス文明の詳細な社会変動に関する通時的比較研究を行う、③植民地時代から現代まで、メソアメリカとアンデスの文明が中南米の先住民文化に及ぼした影響を検証することである。さらにこれらの成果を基に導かれる歴史的教訓と文明研究の今日的意義を探求する。

■研究期間に何をどこまで明らかにしようとするのか

本領域研究は、精密な編年を基にメソアメリカ文明とアンデス文明という、一次文明の詳細な社会変動に関する実証的かつ基礎的な通時的データを収集して比較研究し、環境変動、王権、農耕、牧畜、人口変動、戦争、経済、イデオロギー等の諸側面から実証的かつ多面的に検証する。グアテマラとペルーで航空レーザー測量を実施して、マヤ文明のセイバル遺跡の都市全体と周辺地域及びナスカ台地と周辺地域の遺構の空間分布を広範に調査する。遺跡の航空レーザー測量は、グアテマラでは初めてである。さらに両文明のデータから、いつ、なぜ、どのように都市や社会が変動し、広域を支配する政治体制が発達したのか

を比較する。実証的な比較文明論の研究の基盤となるのが、高精度の編年と環境史復元である。「環太平洋の環境文明史」の自然科学研究において世界標準の年代目盛を作成する上で明らかとなったのは、湖沼の年縞堆積物は蓄積性の誤差をもつという点であり、また北半球で作成した年代目盛もアンデス地域のような南半球の低緯度では未だにデータの蓄積が少なく 10 数年のズレを伴うことである。本領域研究では、統計的な誤差がない年輪年代法でこのズレを修正する。

本領域研究は、古代文明の詳細な社会変動を解明するだけでなく、植民地時代や現代を研究する歴史学者や文化人類学者からなる計画研究 A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」を加え、より長い時間軸で文明の動態を探求する。計画研究 A04 では、古代文明に関する情報が植民地時代から現在までの中南米の先住民文化の表象に及ぼす影響を「古代文明の資源化」をキーワードに考察する。先住民と非先住民の双方が、過去や文明をどのように評価しながら先住民文化を描いてきたかを探る。こうして後世の人間が資源として活用する古代アメリカ文明という視点を提示し、「文明の終焉」という概念に再考を促す。

■どのような点が「我が国の学術水準の向上・強化につながる研究領域」であるか

本領域研究は、従来の世界史研究で軽視されてきた中米メソアメリカと南米アンデスという、古代アメリカの二大文明について、人文科学と自然科学の多様な研究者が連携して新たな視点や手法による共同研究を推進する。研究組織は、メソアメリカとアンデスの考古学、歴史学、多様な研究対象の文化人類学、動物考古学、考古植物学、考古科学、環境地理学、認知心理学、哲学、年代学、古気候学、地質学、地質工学、保存科学、情報科学等、多様な分野の代表的な専門家から構成されている。こうした文理融合の学際的な比較文明論の試みは、世界的にみても珍しい。本研究は古代アメリカ各地の地域・時代毎の特性や詳細な社会変動を通時的に比較研究して、古代アメリカの比較文明論の新たな展開を目指す我が国初の実証的な文理融合の通史研究であり、世界的にも斬新な研究となることが期待される。メソアメリカとアンデスに関するテーマ毎の比較考古学研究はあっても、アメリカ大陸の考古学研究は地域毎に細分化され、個別に研究される場合がほとんどである。さらに諸外国においても、考古学、歴史学、文化人類学の研究は専門化・細分化されて各研究分野の研究者間の交流がほとんどないために、スペイン人の侵略以前の先スペイン期から現代までの先住民の研究が通時的に論じられることは少ない。

本研究の学術的な特色・独創的な点は、以下の3点である。(1) 北半球で確立した世界標準の年代目盛と南半球の低緯度の誤差を年輪年代法で修正することによって、古代アメリカの文明の盛衰に及ぼした環境変動や他の要因をより精緻に検討することが可能になる。(2) 従来はテーマ毎の比較考古学研究はあっても、メソアメリカ文明とアンデス文明が個別に研究される傾向が強かったのに対して、本研究は旧大陸の文明の影響を受けずに発達した一次文明としての両文明それぞれの特性や社会変動を、環境変動、王権、農耕、牧畜、戦争、政治、経済、イデオロギーや人口変動等に関して多面的に比較し、多様な対処方法を明らかにする。(3) 研究対象とする時代を先スペイン期に限定するのではなく、植民地時代や現代の中南米の人々が古代文明を資源化して再解釈する様式を示し、古代アメリカの「文明の終焉」の概念を批判的に検討する。

アメリカ大陸のメソアメリカ文明とアンデス文明を正しく理解することにより、旧大陸のいわゆる「四大文明」に基づき形成されてきた一般的な文明観を大幅に修正できる。文系と理系の多様な研究者による本領域研究は、世界史における諸文明の共通性と多様性を再認識し、従来の西洋中心的な文明史観では得られない新しい歴史的知とバランスの取れた「真の世界史」・「真の文明史」の構築に大きく寄与する。中堅・若手研究者を中心とする本研究の推進は、古代アメリカの比較文明論に関する我が国の学術水準を国際的に向上・強化し、革新的な人材育成につながると期待される。

2. 研究の進展状況【設定目的に照らし、研究項目又は計画研究ごとに整理する】（3ページ以内）

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとし、現在までにどこまで研究が進展しているのか記述してください。また、応募時に研究領域として設定した研究の対象に照らして、どのように発展したかについて研究項目又は計画研究ごとに記述してください。

■研究項目 A01—古代アメリカ文明の高精度編年体系の確立と環境史復元：

本研究では、樹木年輪と湖沼堆積物を用いて、中米メソアメリカと南米アンデスの古代文明の高精度編年体系を確立する。これらの試料を用いて自然環境システムの変動を復元し、当時の人類社会・文明と環境との関係を明らかにすることで古代アメリカの環境文明史を確立する。計画研究 A02、A03 の航空測量データの解析に協力し、新規の遺構探索に有用な地形情報を提供する。主として中米グアテマラでは湖沼調査と考古植物学調査を、南米ペルーでは樹木年輪調査を実施した。

グアテマラ・ペテシュバトゥン湖（GPB）調査（H26-27）では、約 9m にわたる極めて良好な年縞堆積物試料（GPB-pst）と表層堆積物試料（GPB-lim）の採取に成功した。GPB-pst を用いて、年輪年代法により誤差のない年縞の年代を決定できた。これは世界初の成功例であり、当初目的である世界最高水準の年代軸構築のきっかけとなる成果を得た。また、GPB-lim では調査年の 2015 年に形成された年縞が確認され GPB が過去から現在まで継続的に年縞を形成している確定的な証拠が得られた。その結果、現代の気象観測等の環境数値データを用いた定量的な環境復元モデルの構築が期待できることになった。一方で、この堆積物試料がカバーする年代は約 600 年間と短く、マヤ文明史（約 3000 年前～16 世紀）を完全にカバーできない。同湖の別地点で採取した堆積物試料（GPB-vib、年縞なし）が過去約 3000 年間をカバーするため、GPB-vib と GPB-lim、GPB-pst の詳細な対比を行いつつ、より長期の年縞堆積物の新規採取が望ましいとの結論が得られた。GPB-pst について μ XRF コアスキャナーを用いた高時間分解での元素分析を行った（英国 Aberystwyth 大学の Henry Lamb 教授との国際共同研究）。セイバル遺跡の考古植物調査を継続し、堆積物の花粉分析の結果と比較研究を実施した。計画研究 A02 が実施した遺跡の航空測量で得られたデータから密林の被覆を除去した赤色立体地図を得られた。人工的な構造物が多数検出され、現地の踏査でマヤ文明の遺構が確認されて当該地域の考古学研究に有益な情報を提供した。

ペルー南部・ナスカ台地では、代表的な遺跡出土材（ワランゴ、エスピーノ）の現生木植生調査を実施し、試料を収集した。研究開始当初、これらの年輪年代学的な知見はほとんどなく、年輪形成のメカニズムも未知であった。試料の木材組織、年輪構造の分析から、考古学試料の樹種鑑定に用いる標準試料を作成した。その結果、ナスカ地域での樹木の年輪形成に関する知見が得られ、年輪解析が可能となった。複雑な組織構造を持つワランゴ材の年輪解析のために、世界最高水準の年輪撮像システムを開発し、高解像度の年輪画像の収集と炭素・酸素同位体比の測定試料の調整を継続した。計画研究 A03 から考古試料（出土木材）の提供を受け、年輪解析、樹種同定、年輪解析用試料の作成を実施した。また、一部の試料については ^{14}C 年代測定を実施した。以上の成果から、本計画研究の当初目的である当該地域の古環境復元のための準備は整った。

■研究項目 A02—メソアメリカ比較文明論：

本研究は、中米メソアメリカを代表するマヤ文明とテオティワカン文明、メソアメリカ南東部、中央アメリカ南部という中米の諸文明と文化の考古学調査の成果を比較研究し、メソアメリカ文明の盛衰に関する通時的データを提供・分析する。グアテマラのセイバル遺跡の都市中心部だけでなく、周辺部に住んだ支配層や農民の住居跡を発掘して、出土遺物の詳細な分析を通して 2000 年にわたるマヤの全社会階層の研究を実施した。グアテマラ考古学に航空レーザー測量を初めて導入して、熱帯雨林に覆われたセイバルの都市全体と周辺地域の地形やマヤ文明の遺構を 400km² にわたって探査することに成功した。その結果、セイバル遺跡では前 1000 年頃から居住の定住性の度合いが異なる多様な集団が、共同体の公共祭祀及び公共祭祀建築や公共広場を建設・増改築する共同作業によって社会的な結束やアイデンティティを固め、マヤ文明が発展したことが明らかになり、成果を米国科学アカデミーの学術誌 PNAS に刊行した。マヤ文明の起源に関しては、公共祭祀の舞台の公共祭祀建築や公共広場を建設する必要性を住民に納得させて物質化したイデオロギーが重要であっただけでなく、マヤの人々は遠距離・地域間交換に参加して、グアテマラ高地産の翡翠や黒曜石、海産貝のような重要な物資だけでなく、観念体系や美術・建築様式等の知識を取捨選択しながら交換してマヤ文明を築き上げていったことがわかった。セイバル王朝は 5 世紀に一時的に衰退した後、7 世紀に復興するが、10 世紀に衰退した。

メキシコのエル・パルマール遺跡で発掘調査と測量調査を行い、北周縁部のマヤ文字が刻まれた階段の解読によって、ラカム（旗手）の称号を持つ集団を特定した。これは、マヤ文明の考古学研究における最初の事例である。各時代の遺構から編年の確立に必要な土器と ^{14}C 年代測定の試料を収集して、公共建造物と複合住居跡の増改築の推移を明らかにした。メキシコのテオティワカン遺跡では住居跡の測量調査を行い、古代国家の周縁部における古代国家形成から繁栄、終焉に至る社会変化の過程で、支配者や住人など様々な主体が古代都市の形成に関与していた点を実証的に明らかにした。またテオティワカン国家形成

以前との比較研究を実証的に行うために、トラランカレカ遺跡で発掘調査と測量調査を行った。メキシコ中央高原における都市化現象は、先行研究で重要視している集権化、技術の向上、経済的余剰の増加といった側面のみならず、ピラミッドや洞窟などを用いて自然景観を都市や集落内に取り込み、世界観の一部として創生することによっても引き起こされることが判明した。

エルサルバドルのサン・アンドレス遺跡の測量調査と発掘調査を実施し、居住開始期から火山の大噴火災害、復興、最盛期、終焉に至る過程を復元してメソアメリカ周縁部の盛衰過程を知る上で貴重なデータを得た。ニカラグア太平洋岸において遺跡の踏査を行い、マナグア湖畔のチラマティーヨ遺跡とパス・イ・レコンシリアシオン遺跡で発掘調査を行い、従来の土器編年を検討した。

公募研究では、エルサルバドルのチャルチュアパ遺跡の発掘調査によって先古典期中期から終末期に相当する層から良好な土器資料を得ると共に、AMS 法による ^{14}C 年代測定を行った。火山灰の編年学的研究では、採取した試料の ^{14}C 年代及び火山灰試料の化学組成分析を通じて対象地域の環境変化を検討した。

本研究は、中米の諸文明と文化の盛衰に関する基礎的な通時的データを提供・分析してその成果を比較研究するための土台を築き上げて、メソアメリカ比較文明論に関する共同研究を当初計画の通りに達成することができた。

■研究項目 A03—アンデス比較文明論：

本研究は、南米アンデス文明を代表するナスカ社会、パラカス社会、ワリ社会、イカ社会、インカ帝国に関する学際的な調査を実施して、精密な編年を基にアンデス文明の社会変動に関する通時的データを提供・分析する。世界遺産ナスカの地上絵を調査対象とするため、その保存活動にも積極的に寄与する。

「村落遺跡に関する総合的研究」では、地上絵が集中的に描かれたナスカ台地のすぐ北に広がるインヘニオ谷上・中・下流域全域において踏査を行い、合計 426 点の遺跡を登録した。これらは居住遺跡、祭祀遺跡（基壇、テラス）、墓地、地上絵である。遺跡が利用されたのは、前 5 世紀から後 16 世紀の約 2000 年間である。この期間にパラカス期（中・後期）、ナスカ期（前・中・後期）、ワリ期、イカ期、インカ期の諸社会が、インヘニオ谷で成立した。遺跡の数はナスカ前期に増大したが、ナスカ中・後期に減少し、イカ期に激増した。遺跡の数が減少したナスカ中・後期は、先行研究では乾燥化が進んだ時期だと考えられている。一方、遺跡の数が激増したイカ期は湿潤期だと考えられている。遺跡の数と気候変動の対応関係から、遺跡の数の増減が人口と増減と対応する可能性を指摘することができる。また、ナスカ期の村落社会は居住地の外側に祭祀施設や墓地が配されていたが、イカ期になると居住地に隣接して祭祀施設や墓地が設定されるようになった。こうしたセトルメントの変化は、イカ期における社会組織の変化に起因していると考えられる。インヘニオ谷の踏査で注目したベンティーヤ遺跡を、平成 27 年度に発掘調査した。東西約 4km にわたって広がるベンティーヤ遺跡は、インヘニオ谷における最大規模の遺跡で、先行研究では巨大な住居域だとみなされていた。しかし、今回の発掘調査によって従来の説は否定され、ベンティーヤ遺跡は基壇と広場から構成される祭祀空間であることが判明した。またこの遺跡において大規模な建築活動があったのは、ナスカ早期～中期（前 1 世紀～後 5 世紀頃）に限定されるという見通しが得られた。

「ナスカの地上絵の学際的研究」では、平成 26 年度にラクダ科動物の地上絵（17 点）をナスカ市街地付近で発見した。一方、平成 27 年度には「舌を伸ばした動物」の地上絵をナスカ台地の中央部で発見した。両者は制作技法（白・黒面を利用して制作）と規模（50m 未満）により、パラカス後期（ナスカ早期を含む）に制作されたと考えられる。ラクダ科動物の地上絵に関しては、認知心理学的な調査を行った。山の斜面に描かれたラクダ科動物の地上絵は、近距離から人が対面してわかるという特徴を備えている上、それぞれに対応した最もふさわしい観察地点が個別に存在することが判明した。一方、「舌を伸ばした動物」の地上絵は、居住地から大神殿カワチへの古道の脇にあり、この古道には同じパラカス後期に制作された「斬首の場面」の地上絵、「コンドル」の地上絵が分布している。全て斜面に描かれた小型の地上絵であるため、人間の目の高さからでもその形を識別することができる。そこで神殿へ巡礼中の人々が、これらの地上絵を目にしていたと考えられる。おそらく巡礼の際の目印として利用されていたのであろう。村落遺跡から、パラカス後期の地上絵へのアクセスは特に制限されていないので、多くの人々が自由に地上絵に近づくことができた。地上絵が制作された時期には神官たちが社会の中心を占めていたが、地上絵へのアクセスに関しては神官たちによる直接的なコントロールが及ばなかったと考えられる。

ハチドリ、猿、コンドル、蜘蛛などの大型の地上絵（50m 以上）はナスカ前期に制作され、これらの巨大な動物の地上絵はナスカ中期になって直線の地上絵によって切断されたことが、土器の分布調査より判明した。従来、巨大な動物の地上絵は土器の図像表現との類似から、ナスカ期に制作されたと論じられてきたが、本研究によってさらに詳しい制作時期が判明した。また巨大な動物の地上絵は、当時の神殿の近くに分布しているので、神官のコントロールを受けていた可能性が高い。直線の地上絵に関しては、情報科学におけるネットワーク構造の観点から分析したところ、歩行路である可能性が極めて高い地上絵を同定することができた。共伴する土器の分析から、直線の地上絵は主に 10～16 世紀に利用されたことが判

明した。さらに、視覚情報処理の視点から歩行実験を行ったところ、直線の地上絵は歩行する際のガイドとして機能したという見通しが得られた。これまでの研究成果がペルー政府から高く評価されて、ペルー文化省と山形大学の間で、地上絵の保護に関する特別協定が平成 27 年 4 月に締結された。そこで、保存科学・環境地理学の視点から地上絵を保護するための現地調査を本格化すると共に、倫理的な側面から地上絵の保護について検討している。なお、村落遺跡調査及び地上絵の学際的研究のために、ナスカ台地と周辺部において航空レーザー測量を実施した。

公募研究では、南米乾燥地帯で古くから自生するワランゴ樹木年輪の同位体分析を用いた気候復元モデルの構築とナスカ台地の古環境の抽出のために、原生ワランゴ樹木年輪の分析を行った。また平成 28 年度に予定している形成期神殿コトシュの発掘に向けて、発掘地点の選定、写真測量などを行った。

本研究項目は、南米アンデス文明の諸社会の盛衰に関する基礎的な通時的データを提供・分析してその成果を比較研究するための土台を築き上げて、アンデス比較文明論に関する共同研究を当初計画の通りに達成することができた。

■研究項目 A04—植民地時代から現代の中南米の先住民文化：

本研究は、アメリカ大陸の先スペイン期に栄えたメソアメリカ文明とアンデス文明が、植民地時代から現代までの中南米の先住民文化に及ぼした影響を「古代文明の資源化」という概念を用いて検証する。本研究は、代表者、分担者、公募研究者の計 10 名が、それぞれ事例研究を通じて古代文明の資源化の諸相を解明する個別研究と、それらを比較し古代文明の資源化の理論化を目指す比較研究を行う。個別研究において研究する対象は①人類学／民族学博物館における先住民文化展示（鈴木、研究代表）、②植民地期メキシコの年代記（井上）、③チリの先住民文化マプーチュによる文化復興運動（工藤）、④メキシコ観光庁の「神秘的集落」認定制度（小林）、⑤メキシコの遺跡公園整備計画（杓谷）、⑥メキシコ市による「旧先住民村落」認定制度（禪野）、⑦パラグアイとパナマにおける先住民文化表象（藤掛）、⑧グアテマラ先住民の織布とその流通（本谷）、⑨エクアドルの先住民教育（生月）⑩植民地期ラプラタの歴史文書（武田、公募）である。いずれも平成 26 年度、27 年度中に 1 ないし 2 回、調査地でフィールドワークを行い、予定通りデータの収集を行った。

個別研究において事例を分析する枠組みとして、平成 27 年度に 1) 資源化の政治学、2) 資源化の解釈学、3) 資源の想像の 3 項目を考案した。1) は古代文明を資源化しようとするアクターの関心を明らかにし、異なる関心をもつアクター間の関係を問うこと、2) はアクターが資源化に際して古代文明に見出す意味を問うこと、3) は資源化する古代文明の実態が明確でない時にアクターが行使する想像力を問うことである。今後この枠組みを用いて、各研究者が事例の分析を進める。比較研究は、個別研究が扱う諸事例を A.植民地時代と現代の差異、B.メソアメリカ・アンデス・その周辺地域による差異、C. 資源化を試みるアクターの社会的属性（先住民・国家・企業・市民等）の差異の 3 点から比較する。

予想される仮説は、a.植民地時代に行われた古代文明の資源化の試みそれ自体が、現代において再資源化される可能性がある、b.古代文明の資源化は考古学的情報の豊富なメソアメリカ／アンデス地域において実証的であるのに対し、周辺部では情報不足を想像力によって補う傾向がある、c. 資源化を試みるアクターの社会的属性によって資源化の内容は異なり、アクター間の利害関係に応じてそれぞれの資源化の内容が変化する、の 3 点である。既に一部の個別研究からこれらの仮説が検証されつつある。例えば、b.について、鈴木博物館展示の比較研究から、メソアメリカ地域の方がアンデス地域よりも古代文明と現代の先住民文化との連続性が強く意識されていること、及び後方で連続性が示唆されるのは国防・シャマニズム・料理など特定の文脈を設定した場合であることが指摘されている。また藤掛の研究からは、周辺地域であるパラグアイでは、歴史的起源が必ずしも明らかでない手工芸品のニャンドティが、パラグアイ文化の象徴として想像され、広く受容されていることが明らかになった。c.については、小林と禪野の研究から、国家や自治体等の公的機関による先スペイン期文化財の管理政策がきっかけとなり、地域住民による保全運動や観光産業の進出が生じたことが報告されている。杓谷の事例では、住民の反応は先住民の露店商による遺跡の不法占拠の形を取るに至り、遺跡を資源化しようとする他のアクターとの関係が膠着状態となったため、不法占拠が常態化していることが明らかにされた。今後は、個別研究の成果を集約しながら、研究代表者のリーダーシップの下に仮説の検証を進めていく。

3. 審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況（2 ページ以内）

審査結果の所見において指摘を受けた事項があった場合には、当該コメント及びそれへの対応策等を記述してください。

審査結果の所見において指摘を受けた事項

「本研究領域における文明論が明確でなく、環境と文明の関係をいかにとらえようとしているかについては不明瞭な部分が残っている。特に、比較のための適切な分析枠組みをつくるために、研究計画にさらに工夫が必要であることが指摘された。また、研究項目 A04 の計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」については、他の 3 つの研究項目に比べると異質性が高く、全体がどのように統合されるのかという点が説得的に示されなかった。研究の実行可能性をさらに高めるため、領域全体として研究項目間の有機的な結合を生み出す、より精緻な枠組みの構築が望まれる」

対応状況

本研究領域における文明論をより明確にし、領域全体として研究項目間の有機的な結合を生み出す、より精緻な分析枠組みを構築するために、計 2 回の領域会議（研究者全体集会）を主催した（表 1）。本研究は、1) メソアメリカ文明とアンデス文明の比較、2) 古代アメリカ文明史と環境史の比較、3) 古代アメリカ文明と現代の比較、という 3 つの分析枠組みで比較することを確認した。第 3 回領域会議は、H28 年 6 月 19 日に実施する予定である。個人の研究と各計画研究の研究を推進するだけでなく、領域全体で共同研究を推進するためには、他の計画研究の研究内容を互いに勉強して理解を深めなければならない。第 1 回領域会議の終了直後に、各研究項目の研究代表者が研究分担者や連携研究者と協力して、領域研究に関連する推奨文献リストを研究項目毎に取りまとめて領域 ML で全メンバーに送付して有効に活用した。

研究項目間の連携をより密接かつ円滑にするために、研究項目間の公開合同研究会を計 3 回主催した（表 2）。領域研究の全メンバーが参加する領域会議と比べて、より少人数のメンバーが詳細なデータを含む長めの研究発表を行い、より綿密な議論を重ねて共同研究を推進できた。とりわけ、研究項目 A02・A03 公開合同研究会では、研究項目 A02 と A03 の研究代表者の青山と坂井がそれぞれ発表した。研究項目 A01 の研究代表者の米延が司会を、研究項目 A04 の鈴木がコメンテーターをそれぞれ務めて、比較研究のための適切な分析枠組みをつくるために工夫を重ねた。メソアメリカ文明とアンデス文明の諸社会の変化に関する事例研究の通時的な比較研究を行う前の基礎的な作業の一つとして、両文明の諸社会でそれぞれ共有された文化実践に関する類似点と差異及び社会変化の過程を比較して、両文明の特性を検討した（表 3・4）。青山はペルーのナスカ台地の北のラ・ベンティーヤ遺跡の発掘調査で坂井と意見を交換し、坂井と鈴木はグアテマラのセイバル遺跡の発掘調査に立ち会い、比較研究を推進した。青山と坂井は、研究項目 A01 のメンバーによるセイバル遺跡近郊の湖沼調査に立ち会い、文明の盛衰と環境変動の因果関係を検証するために現場で議論を重ねた。本領域では、環境の自然変動の古代社会へのインパクトといった単線的な因果性だけを想定せず、遺跡での植生環境や植物利用の変遷史データを通して環境の自然・人為変動（古環境記録）と文明の盛衰等の考古学的記録を正確な時間軸上で並べることで、環境と文明との関係をいかに捉えるべきかを客観的・実証的に比較研究した。また堆積物から得られる古環境記録と遺跡出土の植物遺体の分析の比較研究から人間の自然利用を重点的に解明した。いくつかの植物種を対象を絞って現生の植生を重点的に調査して、より実証的に文明の盛衰と植物のかかわりを明らかにした。

研究項目 A02 と A04 の研究成果をより明確に結びつけるために、日本ラテンアメリカ学会の分科会「現代メソアメリカ社会における古代遺跡の保存と活用—文化資源の管理をめぐる学際的パースペクティブ」（H27 年 5 月 30 日）で若手研究者が中心となって研究発表を行い、その成果を古代アメリカ学会の学会誌『古代アメリカ』の特集「資源化される古代文明—遺跡の調査と活用に関わるアクター分析」で出版した（福原 2015; 小林 2015; 杓谷 2015; 鈴木 2015）。日本文化人類学会の分科会「過去に学ぶ／過去を活か

す」(H28年5月28日)では、研究項目A04の5名の研究者の発表に対して青山がコメンテーターを務めて、研究項目A02とA04の間の連携をさらに強化した。H28年10月29・30日にはメキシコ、グアテマラ、アルゼンチン、アメリカの研究者を招聘し、研究項目A02、A03、A04の研究者が参加して日本初のメソアメリカ研究者国際会議を東京で開催し、成果をH30年度にメキシコ国立自治大学から刊行する。

表1 領域会議：研究者全体集会一覧

第1回領域会議：H26年10月19日、キャンパス・イノベーションセンター東京（東京）

第2回領域会議：H27年6月7日、国立民族学博物館（吹田市）

第3回領域会議：H28年6月19日予定、キャンパス・イノベーションセンター東京

表2 研究項目間の公開合同研究会一覧

(1) 研究項目A02・A04公開合同研究会、H26年12月20日、専修大学（東京）、報告者：福原弘識「テオティワカン国家形成の考古学的研究」、杓谷茂樹「切り拓かれるべき自然、包み込む「自然」：カンクン・ホテルゾーンの遺跡公園の見せ方から考える」

(2) 研究項目A02・A04公開合同研究会、H27年12月20日、慶応義塾大学（東京）、報告者：市川彰「エルサルバドルにおけるコミュニティ考古学の実践と課題：住民による遺跡発見、調査、価値の創出、そして活用まで」、藤掛洋子「パラグアイにおける伝統工芸：ニヤンドティ（蜘蛛の糸）の資源化について」

(3)研究項目A02・A03公開合同研究会、H28年1月23日、キャンパス・イノベーションセンター東京（東京）、報告者：青山和夫「古代アメリカの比較文明論の新展開に向けて：メソアメリカ比較文明論試論」、坂井正人「古代アメリカの比較文明論の新展開に向けて：アンデス比較文明論試論」

表3 メソアメリカとアンデスの文化実践の類似点

生業	①極めて多様な自然環境に適応した文明、②初期の定住と季節的な移住が共存、③農耕定住が成立する以前の非農耕定住社会、④土器の使用が比較的遅かった文明、⑤車輪が実用化されなかった文明、⑥ミルクの香りのしない文明
経済	①石器の都市文明、②鉄器のない文明、③支配層がものづくりをする文明
政治	①主に非囲壁都市、②アンデス文明やテオティワカン文明の図像では、王など特定の権力者の人物像は少ない、③王は神聖王であり、王宮や王墓が建造された、④戦争や政略結婚、⑤貧富・地位の差異
世界観と儀礼	①多神教、②循環的な時間の概念、③二元論的な世界観、④神殿更新の文明

表4 メソアメリカとアンデスの文化実践の差異

生業	①アンデスとは異なり、海拔3000mを超える高地は居住されなかった、②海岸部では、アンデスのような海岸砂漠地帯はなかった、③非農耕定住がアンデスより3000年ほど遅かった、④農耕定住がアンデスより2000年ほど遅かった、⑤主に非大河流域の文明、⑥トウモロコシを主食、⑦牧畜のない文明
経済	①黒曜石製石刃を大量に製作・使用した文明、②冶金術の発達がアンデスより2000年ほど遅かった、③洗練された石彫を多用した文明
政治	①統一王国のない文明、②ネットワーク型の文明、③王国の食料倉庫が整備されなかった、④都市がアンデスよりも1000年ほど早く発達した、⑤農耕定住から数百年で都市が発展、⑥王国や王権がアンデスよりも数百年早く発達、⑦アンデス文明と比べると、マヤ文明やサボテカ文明の図像では王や貴族などの特定の権力者の人物像が多い
世界観と儀礼	①公共祭祀建築の建設がアンデスより2000年ほど遅かった、②「はじめに土器ありき、神殿は土器の後」、③メソアメリカの神殿更新は王権を強化する政治的道具になった、④文字文明、⑤20進法の文明

4. 主な研究成果（発明及び特許を含む）【研究項目ごとに計画研究・公募研究の順に整理する】

（3 ページ以内）

本研究課題（公募研究を含む）により得られた研究成果（発明及び特許を含む）について、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、図表などを用いて研究項目ごとに計画研究・公募研究の順に整理し、具体的に記述してください。なお、領域内の共同研究等による研究成果についてはその旨を記述してください。記述に当たっては、本研究課題により得られたものに厳に限ることとします。

研究項目 A01・A02・A03・A04 共同研究

青山和夫, 米延仁志, 坂井正人, 鈴木紀 「「古代アメリカの比較文明論」プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17: 119-127, 2014, 査読有.

4つの研究項目の研究代表者が、新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」プロジェクトの学術的背景と問題の所在、目的と概要、学術的な特色と文理融合の共同研究で期待される成果について、古代アメリカ学会の学術誌『古代アメリカ』に共著で投稿した査読論文である。

研究項目 A01・A02 共同研究

(1) Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón, Hitoshi Yonenobu Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Coexisting Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 112(14):4268-4273, 2015, 査読有.

グアテマラのセイバル遺跡の中心部と周辺部における大規模で精密な層位的な発掘調査、詳細な考古・自然遺物の分析及びマヤ考古学では例外的に豊富な試料の 14C 年代測定による精密な編年の結果、先土器時代（前 1000 年以前）に居住地の移動を繰り返していた狩猟採集民の集団が定住共同体を確立するというプロセスにおいて、①定住という新たな生活様式は、全ての社会集団の間で必ずしも同時に起こらなかった、②大規模な公共祭祀建築は、定住共同体が確立された後ではなく、それ以前に建設されることもあった、という実証的なデータを世界の考古学に加えた。居住の定住性の度合いが異なる多様な集団が携わった、公共祭祀や公共祭祀建築を建設する共同作業は、社会的な結束やアイデンティティを固めてマヤ文明の形成に重要な役割を果たしたという、マヤ文明の初期の姿がより明らかになった。

(2) Aoyama, Kazuo, Hitoshi Yonenobu, Takeshi Inomata, Kazuyoshi Yamada, Hiroo Nasu, Toshiyuki Fujiki, Yoshitsugu Shinozuka, Katsuya Gotanda, Yasuharu Hoshino Investigaciones Arqueológicas y Paleoambientales en y alrededor de Ceibal, Petén, Guatemala. *XXVII Simposio de Investigaciones Arqueológicas*, 987-995, 2014, 査読無.

セイバル遺跡近郊の湖沼調査の結果、マヤ地域で世界初となる年縞堆積物が発見された。文理融合の環境文明史の研究を推進した結果、セイバル王朝が複数の要因（人口過剰、環境破壊、戦争など）の相互作用によって 10 世紀に衰退したことが明らかになった。

研究項目 A02・A03 共同研究

青山和夫 「メソアメリカ比較文明論試論—古代アメリカの比較文明論の新展開に向けて—」『古代アメリカ』19:印刷中, 2016, 査読有他に出版予定。

土器、非農耕定住、公共祭祀建築、農耕定住、牧畜、文字、都市、王国、冶金術などの指標に基づいて、メソアメリカ文明とアンデス文明を比べると、極めて異なる社会変化の過程があったことがわかる（図 1）。メソアメリカでは、土器と非農耕定住が前 1800 年頃に起こった。土器の起源は、アンデスとほぼ同時期であるが、非農耕定住は、アンデス海岸地帯で前 5000 年頃に漁労定住が成立してから 3000 年ほど遅かった。公共祭祀建築（神殿）は前 1600 年頃に建設され、アンデスより 2000 年ほど遅れた。「はじめに神殿ありき」のアンデスでは先土器時代に公共祭祀建築が建造されたのに対して、メソアメリカでは「はじめに土器ありき、神殿は土器の後」であった。農耕定住は、アンデスよりも 2000 年ほど遅く前 1000 年以降であった。アンデスでは農耕定住と牧畜が前 3000 年頃に確立されたが、メソアメリカでは牧畜は発達しなかった。

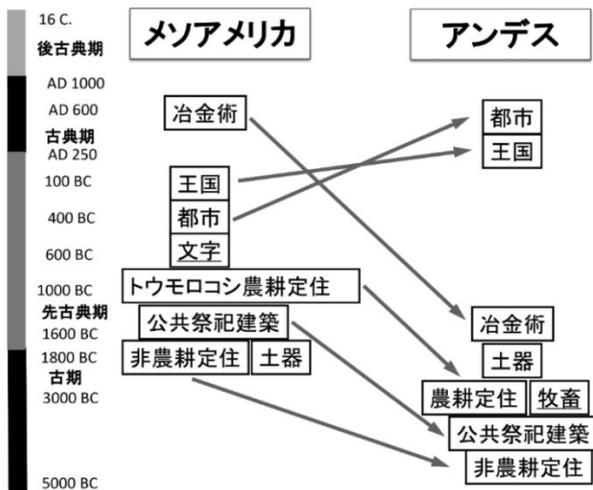


図1 メソアメリカとアンデスの社会変化の比較

研究項目 A02・A04 共同研究

2015「特集 資源化される古代文明—遺跡の調査と活用に関わるアクター分析—」『古代アメリカ』18

研究項目 A02 と A04 の研究成果をより明確に結びつけるために、鈴木や研究項目 A02 と A04 の若手研究者が中心となって『古代アメリカ』で初めて文化人類学者と考古学者が共同研究の成果(4本の査読論文)を特集として出版した(福原 2015; 小林 2015; 杓谷 2015; 鈴木 2015)。

研究項目 A01

これまでの研究項目 A01 の主要な研究対象は以下の通りである。(1) 中米・グアテマラー (a) 湖沼堆積物調査・試料分析、(b) 航空測量データ解析、(2) 南米・ペルー・ナスカ台地— (a) 樹木年輪調査・試料分析、(b) 航空測量データ解析。(1a) ペテシュバトゥン湖 (GPB) 調査では約 9m にわたる極めて良好な年縞堆積物試料 (GPB-pst、図 2) と表層堆積物 (GPB-lim) の採取に成功した。GPB-pst を用いて年輪年代法により年縞の暦年代を決定できた。これは世界初の成功例である。同法では誤差を全く持たず、正確に暦年代 (= 人類史) が得られる。すなわち、本計画研究の目的とする世界最高水準の年代軸構築を達成した。(1b) セイバル遺跡周辺の航空測量データから赤色立体地図を作成した (図 3)。詳細な観察と現地調査の結果、マヤ文明の遺構が多数確認された。(2a) ペルー南部・ナスカ台地の遺跡から出土する主要な木材試料 (ワランゴ、エスピーノ) について現生木試料を収集した。試料の木材組織、年輪構造の分析から、考古試料の樹種鑑定に用いる標準試料を作成した。新規に開発した年輪画像解析装置を用いて高解像度の年輪画像の収集を継続した。これらの成果は H28 年度に査読有の国際誌に原著論文として投稿する。

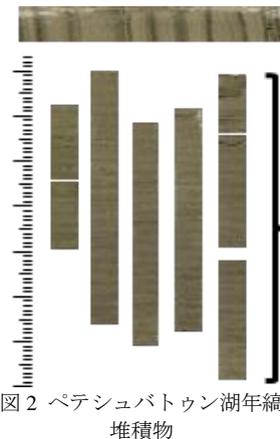


図2 ペテシュバトゥン湖年縞堆積物

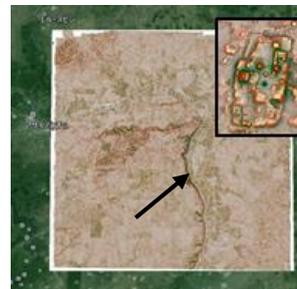


図3 セイバル遺跡周辺の赤色立体図

研究項目 A02

研究項目 A02 では、計 40 本の論文 (内査読有 20 本) を出版した。国内だけでなく、国外で英語やスペイン語の論文を意欲的に刊行し、当該領域の学術水準を国際的に向上・強化した。ケンブリッジ大学出版局の *Ancient Mesoamerica* (Aoyama 2016a) 及び *Antiquity* (Aoyama et al. 2016)、アメリカ考古学会の *Latin American Antiquity* (Tsukamoto et al. 2015a) といった国際誌の査読論文をはじめ、アメリカ (Aoyama 2016b, 2015a, 2014; Tsukamoto et al. 2015b)、イギリス (Aoyama, Graham 2015)、グアテマラ (Aoyama 2015b, Aoyama et al. 2014;

対照的にメソアメリカでは、文字は前 6 世紀頃から使われたが、アンデスでは文字がなかった。メソアメリカの都市は前 400 年以降にアンデスよりも 1000 年ほど早く築かれ始めた。メソアメリカの王国や王権は前 100 年以降に、アンデスよりも数百年早く発達した。冶金術の発達はメソアメリカでは 600 年以降であり、アンデスと比べると 2000 年ほど遅かった。メソアメリカ文明とアンデス文明の形成や社会変化の過程と要因を解明することが重要である。

Ichikawa 2015a; Ito *et al.* 2015) やエルサルバドル (Ichikawa 2015b, 2015c) など論文を出版した。また計 38 本の学会発表を行い、国際学会 (15 本) でも積極的に発表した。たとえば、メキシコ国立自治大学の招待講演 (Aoyama 2015)、アメリカ考古学会 (Murakami, Kataba, López, Chávez, Fukuhara 2015; Tsukamoto 2016, 2015)、アメリカのメソアメリカ会議 (Murakami, Kataba, López, Chávez, Fukuhara 2015)、メキシコの国際学会 (López, Kabata, Muños, Fukuhara 2015)、グアテマラの国際学会 (Aoyama 2015, 2014; Fukaya, Ito, Shibata 2014; Ichikawa 2015; Ito 2014)、カミナルフユ遺跡円卓会議 (Ichikawa 2015)、アメリカニスト国際会議 (Ichikawa 2015; Ito 2015) やエルサルバドルの国際学会 (Ichikawa 2015) など活発に発表した。青山は、世界で初めてのマヤ文明に特化した事典『マヤ文明を知る事典』(青山 2015) を刊行して研究成果の社会還元を努めた。

研究項目 A03

研究項目 03 では、日本語、スペイン語及びドイツ語の学術論文、博士論文、図書、学術報告書を刊行した。ナスカの地上絵の考古学的な研究成果を、スペイン語の学術報告書 (Sakai, Ccoyllo, Olano, Matsumoto, Yamamoto 2015) としてまとめることができた。これはペルー文化省世界遺産局からの依頼で、2009~2014 年に行われた 7 回の現地調査の研究成果をまとめたものである。A03 班がこれまで発見した 500 点以上の地上絵 (動物、直線、幾何学図形) に関する基本情報を提示し、先行研究の中に位置付けた。また、地上絵で行われていた儀礼行為を明らかにするために行った考古遺物の分析結果が提示されている。933 頁にまとめられた本書は、これまでのナスカ研究の集大成である。ペルー文化省は、こうした研究成果に基づいて、ナスカの地上絵の保護と学術研究に関する特別協定を山形大学との間に締結した。情報科学・心理学班 (渡邊, 本多, 門間 2016; 本多, 門間 2015) は直線の地上絵に注目して、その中に歩行路として用いられた地上絵が含まれていることを、情報科学におけるネットワーク構造の視点から明らかにした。さらに、歩行路と考えられる直線の地上絵の上を複数の被験者に歩いてもらい、視覚情報の利用と経路選択に関する心理学・情報科学の実験を行ったところ、直線の地上絵は歩行する際のガイドとして機能したという見通しが得られた。こうした研究成果をアピールするために、アンデス考古学の専門家を招いて、英語やスペイン語の国際シンポジウムを 7 回開催した。また、アメリカ考古学会、アメリカニスト国際会議、動物考古学会、国際鳥類学会などの国際学会で研究成果を発表した。さらにアンデス考古学者を集めて開催された 2 回の招待講演会 (米国 Tulane 大学、ペルーとスイスの博物館の招待講演) において、研究成果を発信した。

研究項目 A04

研究項目 A04 では、各研究者が実施中の個別研究の成果を主に次の 3 つの方法で発表した。1) 所属する学会の学会誌に投稿したもの (古代アメリカ学会 = 鈴木 2015; 小林 2015; 杓谷 2015; スペイン史学会 = 井上 2014)、2) 所属機関や関連する研究機関の研究雑誌に投稿したもの (鈴木 2016; 禪野 2016; 本谷 2016; Zenno 2015; 井上 2015)、3) 専門書の 1 章として執筆したもの (禪野 2015; 本谷 2015; 小林 2014a, 2014b; 杓谷 2014)。A04 の研究内容を広く一般と共有するために、新聞や中南米文化に関する情報誌に寄稿し (鈴木 2015a, 2015b; 藤掛 2015, 2014)、『世界地名大辞典 9 : 中南アメリカ』に編集協力した (井上 2014; 工藤 2014; 小林 2014; 杓谷 2014; 禪野 2014)。研究発表は、海外・国内の学会で行った。国際学会ではアメリカ人類学会 (AAA) 2015 年次大会 (Suzuki 2015)、及びアジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会 (CELAO) 2014 年大会 (Inoue 2014; Kobayashi 2014; Zenno 2014) に参加した。国内学会は、日本文化人類学会 (鈴木 2016; 小林 2016; 杓谷 2016; 禪野 2016; 本谷 2016)、古代アメリカ学会 (井上 2015)、日本ラテンアメリカ学会 (小林 2015; 杓谷 2015; 藤掛 2015) などに参加した。

5. 研究成果の公表の状況（主な論文等一覧、ホームページ、公開発表等）（5 ページ以内）

本研究課題（公募研究を含む）により得られた研究成果の公表の状況（主な論文、書籍、ホームページ、主催シンポジウム等の状況）について具体的に記述してください。記述に当たっては、本研究課題により得られたものに厳に限ることとします。

- 論文の場合、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、研究項目ごとに計画研究・公募研究の順に記載し、研究発表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付し、corresponding author には左に*印を付してください。
- 別添の「(2) 発表論文」の融合研究論文として整理した論文については、冒頭に◎を付してください。
- 補助条件に定められたとおり、本研究課題に係り交付を受けて行った研究の成果であることを表示したもの（論文等の場合は謝辞に課題番号を含め記載したもの）について記載したもののについては、冒頭に▲を付してください（前項と重複する場合は、「◎▲・・・」と記載してください。）。
- 一般向けのアウトリーチ活動を行った場合はその内容についても記述してください。

(1) 主な論文等一覧

論文数：計100本（内査読有37本）、図書：計3冊

研究項目 A01・A02・A03・A04 共同

◎▲青山和夫、米延仁志、坂井正人、鈴木紀「古代アメリカの比較文明論」プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17: 119-127, 2014, 査読有。

研究項目 A01・A02 共同

◎▲Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón, Hitoshi Yonenobu Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Coexisting Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 112(14):4268-4273, 2015, 査読有。

◎▲Aoyama, Kazuo, Hitoshi Yonenobu, Takeshi Inomata, Kazuyoshi Yamada, Hiroo Nasu, Toshiyuki Fujiki, Yoshitsugu Shinozuka, Katsuya Gotanda, Yasuharu Hoshino Investigaciones Arqueológicas y Paleoambientales en y alrededor de Ceibal, Petén, Guatemala. *XXVII Simposio de Investigaciones Arqueológicas*, 987-995, 2014, 査読無。

◎▲青山和夫、米延仁志「マヤ文明の盛衰と環境文明史：セイバル遺跡と近隣湖沼の最近の調査から」『チャスキ』50:4-7, 2014, 査読無。

研究項目 A02・A03 共同

▲青山和夫「メソアメリカ比較文明論試論—古代アメリカの比較文明論の新展開に向けて—」『古代アメリカ』19:印刷中, 2016, 査読有。

研究項目 A02・A04 共同

◎井上幸孝・長谷川悦夫「メソアメリカのなかのニカラグア」『ニカラグアを知るための 55 章』明石書店, 22-26, 2016, 査読無。

◎▲鈴木紀「資源化される古代文明—遺跡の調査と活用に関わるアクター分析—序論」『古代アメリカ』18:95-102, 2015, 査読有。

▲小林貴徳「守るべき遺産、活用すべき資源：メキシコ、チョルーラにおける文化的景観をめぐる行政と市民連帯」『古代アメリカ』18:103-116, 2015, 査読有。

▲杓谷茂樹「資源としての「古代都市チチェン・イツァ」：交叉するステークホルダーそれぞれの思惑と地元露天商」『古代アメリカ』18:117-130, 2015, 査読有。

▲福原弘織「考古学者による古代遺跡の資源化とそのジレンマ：国家的モニュメントとしてのテオティワカン」『古代アメリカ』18:131-142, 2015, 査読有。

研究項目 A01

〔論文〕

▲Nasu, Hiroo How people have changed their mobility in the prehistoric time? A brief review of prehistoric sedentarization and environmental change in the Near East, Japan, and Mesoamerica. *Senri Ethnological Studies*, in press, 2016, 査読有。

那須浩郎「気候変動と狩猟採集民の定住化」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』, 印刷中, 東京大学出版会, 2016, 査読無。

▲Tei, Shunsuke, Hitoshi Yonenobu, Shinya Suzuki, Motonari Ohyama, Katsuya Gotanda, Takeshi Nakagawa, Atsuko Sugimoto Reconstructed July temperatures since AD 1800, based on a tree-ring chronology network in the Pacific region, and implied large-scale atmospheric-oceanic interaction. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 435: 203-209, 2015, 査読有。

Hyodo, Masayuki, Ikuko Kitaba Timing of the Matuyama-Brunhes geomagnetic reversal: Decoupled thermal maximum and sea-level highstand during Marine Isotope Stage 19. *Quaternary International* 383:136-144, 2015, 査読有。

山田和芳、五反田克也、篠塚良嗣、藤木利之、瀬戸浩二、原口強、奥野充、米延仁志、安田喜憲「年縞編年学の進歩」『月刊地球』号外 63:25-30, 2014, 査読無。

研究項目 A02

〔論文〕

計画研究

▲Aoyama, Kazuo Ancient Maya Economy: Lithic Production and Exchange around Ceibal, Guatemala. *Ancient Mesoamerica* 27, in press, 2016, 査読有.

▲Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Flory Pinzón, Juan Manuel Palomo The Development of Maya Civilization and Public Rituals of the Preclassic Maya: Polished Greenstone Celt Caches from Ceibal, Guatemala. *Antiquity* 90, in press, 2016, 査読有.

Aoyama, Kazuo Warfare, Warriors, and Weapons. *Encyclopedia of the Ancient Maya* (Rowman & Littlefield), 376-379, 2016, 査読有.

▲Ichikawa, Akira Cuando y cómo fue la erupción del Volcán Ilopango, El Salvador: Síntesis desde la óptica arqueológica. *Journal of School of Letters, Nagoya University* 12:23-43, 2016, 査読無.

塚本憲一郎「古典期マヤの都市国家におけるイデオロギーのせめぎあい—メキシコ合衆国エル・パルマール遺跡の考古学調査と碑文解説から—」『考古学研究』62:71 - 90, 2016, 査読有.

長谷川悦夫「中央アメリカ、ニカラグア共和国マナグア湖畔の考古学調査」『埼玉大学紀要(教養学部)』52:233-241, 2016, 査読無.

▲Aoyama, Kazuo, Elizabeth Graham Ancient Maya Warfare: Exploring the Significance of Lithic Variation in Maya Weaponry. *Lithics: the Journal of the Lithic Studies Society* 36:5-17, 2015, 査読有.

▲Aoyama, Kazuo Microwear Analysis of the Obsidian Macroblade. *Temple of the Night Sun: A Royal Tomb at El Diablo, Guatemala* (Precolumbian Mesoweb Press), 240-242, 2015, 査読有.

▲Aoyama, Kazuo La complejidad socioeconómica maya del período Preclásico Medio: un análisis diacrónico de artefactos líticos en y alrededor de Ceibal, Guatemala. *XXVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, 889-900, 2015, 査読無.

▲青山和夫「先古典期マヤ文明の宗教儀礼とものづくり—グアテマラのセイバル遺跡で先古典期中期に埋納された黒曜石製石器を中心に—」『古代アメリカ』18:41-63, 2015, 査読有.

▲青山和夫「マヤ文明の起源と公共祭祀—グアテマラ・セイバル遺跡の公共祭祀建築と緑色石製磨製石斧の供物を中心に—」『古代文化』67:53-72, 2015, 査読有.

Tsukamoto, Kenichiro, Octavio Esparza Olguín Ajpach' Waal: The Hieroglyphic Stairway of the Guzmán Group of El Palmar, Campeche, Mexico. *Maya Archaeology* 3:31-55, 2015, 査読有.

Tsukamoto, Kenichiro, Javier López Camacho, Luz Evelia Campaña, Kotegawa Hirokazu, Octavio Esparza Olguín Political Interactions among Social Actors: Spatial Organization at the Classic Maya Polity of El Palmar, Campeche, Mexico. *Latin American Antiquity* 26:200-220, 2015, 査読有.

▲嘉幡茂「メキシコで考古学調査を行う意義と課題—トラランカレカ考古学プロジェクト」を介して」『京都外国語大学国際文化資料館紀要』11:1-11, 2015, 査読無.

▲嘉幡茂, 村上達也「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元:『トラランカレカ考古学プロジェクト』の目的と調査動向」『古代文化』67: 99-109, 2015, 査読有.

市川彰, 南雅代, 八木宏明「メソアメリカ南東部太平洋沿岸部における先スペイン期製塩活動—エルサルバドル共和国ヌエバ・エスペランサ遺跡を中心に—」『日本考古学』40:1-18, 2015, 査読有.

Ichikawa, Akira Antes de la erupción del Volcán Ilopango en el Bajo Lempa, El Salvador. *XXVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, 423-432, 2015, 査読無.

▲Ichikawa Akira, Roberto Gallardo, Hugo Diaz, Julio Alvarado Nuevos datos de radiocarbono relacionados con la erupción del volcán Ilopango. *Anales del Museo Nacional de Antropología Dr. David J. Guzman* 53: 160-175, 2015, 査読有.

Ichikawa Akira Evidencias arqueológicas de conflictos en Chalchuapa, El Salvador. *Memoria de V Congreso Centroamericano de Arqueología, El Salvador*, 73-80, 2015, 査読無.

Aoyama, Kazuo Symbolic and Ritual Dimensions of Exchange, Production, Use, and Deposition of Ancient Maya Obsidian Artifacts. *Obsidian Reflections: Symbolic Dimensions of Obsidian in Mesoamerica* (University Press of Colorado), 127-158, 2014, 査読有.

▲青山和夫「先古典期マヤ文明の遠距離交換と石器製作—グアテマラ共和国セイバル遺跡の先古典期中期の打製石器—」『考古学研究』61:83-94, 2014, 査読有.

▲嘉幡茂, 村上達也, フリエタ・M・ロペス, ホセ・J・チャベス・V, 福原弘識「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて—トラランカレカ遺跡考古学プロジェクト—」『古代アメリカ』17:53-72, 2014, 査読有.

▲市川彰「メソアメリカ考古学における日本人研究者」『京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所紀要』14:51-72, 2014, 査読無.

公募研究

伊藤伸幸「“様式化したジャガー頭部”石彫について(1)」『名古屋大学文学部研究論集』62(185):101-123, 2016, 査

読有.

Ito, Nobuyuki, S. Shibata, Julio Alvarado, Miriam Méndez Dos Cabezas de Jaguar Estilizado, excavaciones en El Trapiche, Chalchuapa, El Salvador. *XXVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, 747-758, 2015, 査読無.

〔図書〕

青山和夫『マヤ文明を知る事典』, 336 頁, 東京堂出版, 2015.

研究項目 A03

〔論文〕

計画研究

▲渡邊洋一, 本多薫, 門間政亮「ナスカ台地の移動時における直線の地上絵とラインセンターの利用—ウェアラブルカメラを用いた分析—」『山形大学紀要(人文科学)』18(3):139-154, 2016, 査読有.

▲本多薫, 門間政亮「ナスカ台地におけるラインセンター間の移動について(第3報)—最短経路と経路選択からの検証—」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』12:1-14, 2015, 査読有.

松本雄一「神殿・儀礼・廃棄: 聖なるモノとゴミとの間」『古代文明アンデスと西アジア 神殿と権力の生成』朝日新聞出版, 167-208, 2015, 査読無.

▲瀧上舞「先スペイン期のアンデス地域における食資源の活用とその時代変遷に関する同位体生態学的研究」東京大学大学院新領域創成科学研究科博士論文, 289 頁, 2015, 査読有.

千葉清史「二世界解釈と二側面解釈: そもそも何が問題だったのか?」『近世哲学研究』18: 1-35, 2014, 査読有.

Chiba, Kiyoshi Kants Ablehnung des apagogischen Beweises in der “Transzendentalen Methodenlehre”. *XXIII Kongress der Deutschen Gesellschaft fuer Philosophie, Online Publikation*, 1-8, 2014, 査読有.

Takigami, Mai, Izumi Shimada, Rafael Segura, Hiroyuki Matsuzaki, Fuyuki Tokanai, Kazuhiro Kato, Hitoshi Mukai, Omori Takayuki, Minoru Yonedā Assessing the Chronology and Rewrapping of Funerary Bundles at the pre-Hispanic Religious Center of Pachacamac, Peru. *Latin American Antiquity* 25: 322-343, 2014, 査読有.

公募研究

Suzuki, Yoshiaki, Ryuji Tada, Kazuyoshi Yamada, Tomohisa Irino, Kana Nagashima, Takeshi Nakagawa, Takayuki Omori Mass accumulation rate of detrital materials in Lake Suigetsu as a potential proxy for heavy precipitation: a comparison of the observational precipitation and sedimentary record. *Earth and Planetary Science* 3(5):1-14, 2016, 査読有.

Tsurumi, Eisei, Carlos Morales Castro Excavaciones en la plataforma Z1, Pampa de Mosquito. Primera evidencia del Arcaico Tardío en el valle medio del río Jequetepeque. *Arqueología y Sociedad* 30:353-372, 2016, 査読有.

Kaulicke, Peter, Eisei Tsurumi, Carlos Morales Castro Arqueología y paisaje del arte rupestre formativo en la costa norte de Perú. *Boletín de SIARB* 29:18-24, 2015, 査読無.

〔図書〕

▲Sakai, Masato, Yoshimitsu Ccoyllo, Jorge Olano, Yuichi Matsumoto, Atsushi Yamamoto *Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca (Séptima Temporada)*, Ministerio de Cultura del Perú, 933 頁, 2015.

▲Sakai, Masato, Jorge Olano *Informe Final del Proyecto de Investigación Arqueológica de las Líneas y Geoglifos de la Pampa de Nasca (Sexta Temporada)*, Ministerio de Cultura del Perú, 179 頁, 2014.

研究項目 A04

〔論文〕

計画研究

鈴木紀「ミュージアムの中の古代アメリカ文明」『民博通信』152:4-9, 2016, 査読無.

◎井上幸孝・長谷川悦夫「メソアメリカのなかのニカラグア」『ニカラグアを知るための 55 章』明石書店, 22-26, 2016, 査読無.

▲禪野美帆「近隣居住者の資源としての考古遺跡: メキシコ市内旧先住民村落とエヒードの事例」『商學論究』63(4):171-186, 2016, 査読無.

▲本谷裕子「変わりゆく「伝統」衣装—グアテマラ高地先住民女性の事例より」『慶應教養論叢』137:47-63, 2016, 査読無.

井上幸孝「西洋の拡張と土地の命名(1) —コロン第 1 回航海と「新しい」の系譜」『専修人文論集』97:197-224, 2015, 査読無.

▲Zenno, Miho Los movimientos sociales de los habitantes originarios de una colonia residencial en la Ciudad de México. 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』15:97-113, 2015, 査読有.

禪野美帆「メキシコ市内の旧先住民村落における情報空間: 誰に何を伝えられるのか」『森羅万象のささやき: 民俗宗教研究の諸相』風響社, 309-328, 2015, 査読無.

▲藤掛洋子「パラグアイの女性たちの今日的ジェンダー課題」『女たちの 21 世紀』84:28, 2015, 査読無.

本谷裕子「現代」マヤイメージの生成と変容: グアテマラ高地・女性の織りと装い」『森羅万象のささやき: 民俗宗教研究の諸相』風響社, 285-308, 2015, 査読無.

井上幸孝「ヌエバ・エスパーニャの先住民記録に見る日本とアジア:チマルパインの『日記』を中心に」『スペイン史研究』28:20-27, 2014, 査読無.

Inoue, Yukitaka Un análisis de dos Códices Techialoyan: Huixquilucan y Cuajimalpa. *Quaderni di Thule* 13:609-614, 2014, 査読無.

井上幸孝「メキシコ合衆国」(他 35 項目)『世界地名大事典 9:中南アメリカ』朝倉書店, 45 頁, 2014, 査読無.

工藤由美「テムコ」(他 43 項目)『世界地名大事典 9:中南アメリカ』朝倉書店, 49 頁, 2014, 査読無.

小林貴徳「チョルーラの都市祭礼コミュニティ:バリオのこどもの結束力」『創造するコミュニティ:ラテンアメリカの社会関係資本』晃洋書房, 30 頁, 2014, 査読無.

小林貴徳「メキシコにおける観光開発政策の転換と地域活性:「プエブロス・マヒコス(魅惑的な町)」『アメリカスのまなざし:再魔術化される観光』天理大学出版部, 98-117, 2014, 査読無.

小林貴徳「中央部モレロス州の町村」(他 38 項目)『世界地名大事典 9:中南アメリカ』朝倉書店, 49 頁, 2014, 査読無.

杓谷茂樹「ある日チチェン・イツァ遺跡公園で感じた違和感について:露店商不法侵入問題のいま」『古代アメリカ学会会報』36:4-7, 2014, 査読無.

杓谷茂樹「マヤ文明とパワースポット」『まほら』80:14-15, 2014, 査読無.

杓谷茂樹「切り拓かれるべき自然、包み込む「自然」:カンクン・ホテルゾーンの遺跡公園の見せ方をめぐって」『アメリカスのまなざし:再魔術化される観光』天理大学出版部, 232-251, 2014, 査読無.

杓谷茂樹「アナワク高原」(他 12 項目)『世界地名大事典 9:中南アメリカ』朝倉書店, 23 頁, 2014, 査読無.

禪野美帆「オアハカデフアレス」(他 3 項目)『世界地名大事典 9:中南アメリカ』朝倉書店, 5 頁, 2014 年, 査読無.

本谷裕子「スペイン語を始めましょう:魅惑のメソアメリカへようこそ」『三色旗』797: 18-23, 2014, 査読無.

藤掛洋子「特集南米/参加型社会/クレオール:参加型・対話型のヴィジョン:フィールドワークからのまなざし」『YEAR BOOK』横浜国立大学都市イノベーション学府/研究院, 18-23, 2014, 査読無.

藤掛洋子「はじめに」「あとがき」『パラグアイ戦争史:トンプソンが見たパラグアイと三国同盟戦争』中南米マガジン, 13 頁, 2014, 査読無.

藤掛洋子「国境を越えひろがる市民活動:国際協力と地域活動をつなぐ」『ブックレット地域創造論』横浜国立大学, 80-91, 2014, 査読無.

(2) ホームページ

本領域では、H26 年 7 月から鳴門教育大・米延研究室のウェブサーバでホームページを開設した(<http://dendro.naruto-u.ac.jp/csaac/>)。迅速にコンテンツを更新し、コンテンツ管理システムを用いて運用した。サイトはトップページ、プロジェクトの紹介、研究班の紹介、成果発信、研究成果、リンク、ニュースで構成した。工夫点としては、総括班メンバーが領域の研究・アウトリーチ活動をニュースで速やかに公開した。研究成果や講演会の開催をリアルタイムに広報するためにフェイスブックページ「古代アメリカの比較文明論」を開設し、情報を発信した。

(3) 公開発表等

(a) 学会発表

学会発表は計108本(国内69本、海外39本)で、そのうち海外の招待講演は計6本である。国内だけでなくアメリカ、ドイツ、メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ペルー、パラグアイ、アルゼンチン、韓国などで研究発表を活発に行った。国際研究集会を国内で計12回、国外(ペルーとエルサルバドル)で2回開催した。

海外の招待講演は、以下の通りである。

Sakai, Masato Los Geoglifos: Rituales, líneas vs. figuras biomórficas, cronología. シンポジウム Nasca: Vida, muerte y transformación en el desierto, Museo de Arte de Lima (Lima), 2016.5.26.

Matsumoto, Yuichi, Jason Nesbitt New Insights on Ritual Practices from Campanayuc Rumi, Peru. Middle American Research Institute's Brown Bag Series, Tulane University (New Orleans), 2016.2.13.

Aoyama, Kazuo Rituales Públicos y la Producción Artesanal entre los Mayas del Preclásico Medio: un Estudio de Artefactos Líticos de Ceibal, Guatemala. Jornada de Lítica Maya, Universidad Nacional Autónoma de México (México), 2015.11.25.

Sakai, Masato Geoglyphs and Landscape at the Nasca Pampa, South Coast of Peru. Middle American Research Institute's Brown Bag Series, Tulane University (New Orleans), 2015.3.9.

Inoue, Yukitaka Hacia una Historiografía Novohispana: las fuentes españoles e indígenas. Seminario Permanente de Crónicas Novohispanas y Andinas, Dirección de Estudios Históricos del Instituto Nacional de Antropología e Historia (México), 2015.3.3.

Inoue, Yukitaka Japón y Asia en el Diario de Chimalpain. Retos y Esperanzas de Japón en el siglo XXI: a 400 años de la Misión Hasekura, Universidad Iberoamericana (México), 2014.10.29.

(b) 新聞報道

本領域研究の活動やメンバーに関連する新聞報道は計113本(国内98本、海外15本)を数えた。読売新聞(2016年4月20日、2016年2月14日、2015年11月29日、2015年7月8日、2015年6月2日、2015年5月31日、2015年4月1日、2015年1月4日、2014年10月22日)、朝日新聞(2016年4月20日、2016年2月5日、2016年1月5日、2016年1月5日、2015年9月11日、2015年6月4日、2015年4月2日)、毎日新聞(2016年5月6日、2016年4月20日、2015年8月20日、2015年7月8日、2015年6月1日、2015年4月30日、2015年3月18日)、産経新聞(2016年2月5日、2015年7月8日)や日本経済新

聞(2016年5月12日、2016年5月9日、2015年7月8日、2015年3月12日、2014年11月5日、2014年8月24日、2014年7月26日)だけでなく、地方新聞、さらに朝日中高生新聞(2015年4月5日)、朝日中学生ウィークリー(2014年8月17日)や朝日小学生新聞(2015年3月15日)といった小中高生向けの新聞にも掲載された。ペルーのLa República(2016年4月28日)、Perú 21(2016年4月28日)、Correo(2016年4月28日)、El Comercio(2016年4月28日)、Perú Shimpo(2016年4月25日)、パラグアイのOnce 15 Noticias(2015年11月6日)やエルサルバドルのDiario Co Latino(2015年5月12日)などの中南米の新聞、中国の中国日報(2015年3月24日)、亜太日報(2015年3月24日)や国際日報(2015年3月24日)といった海外の新聞においても報道された。

(c) テレビ・ラジオ番組

本領域研究のメンバーが出演・監修・協力したテレビ番組は計 20 本、ラジオ番組は計 5 本(内メキシコ 2 本)である。テレビ東京「未来世紀ジパング」(2016年5月9日)、フジテレビ「直撃 LIVE グッディ！」(2016年4月22日)、TBS「ぴったんこカンカン」(2015年10月9日)、朝日放送「アタック 25」(2015年9月6日)、NHK BS プレミアム「幻解！超常ファイル特集：超古代文明スペシャル」(2015年6月13日)、NHK「ニュースウォッチ 9」(2015年4月24日)、NHK「WORLD NEWSLINE：ナスカの地上絵を守れ」(2015年4月20日)、NHK BS プレミアム「挑戦はじまる！古代文明の解明」(2015年3月29日)、NHK BS プレミアム「コズミックフロント：宇宙からの目で遺跡を探る」(2015年3月12日)やTBS「Nスタ」(2014年12月11日)などが放映された。

(d) 雑誌報道

雑誌報道は計 11 本であり、『ラテンアメリカ時報』(2016年1月25日)、『NEWS がわかる』(2015年9月15日)や『国際開発ジャーナル』(2015年8月1日)などがある。青山は、進研ゼミ小学講座チャレンジ 5 年生『未来！発見 BOOK』において、小学生向けの特集記事「古代文明「マヤ」の真実をさぐれ！」(2015年2月1日)を監修した。

(e) Web ニュース

本領域の研究活動は、Yahoo ニュース(2016年4月19日)、サイエンスポータル(2015年3月26日)、時事通信社(2015年3月24日)、共同通信社(2015年3月24日)、Australia Network News (2016年5月8日)、Fox News(2016年5月3日)、NBC NEWS(2015年3月24日)など、国内外の計 69 の Web ニュースでも紹介された。

(f) 主催シンポジウム・公開講演会

本領域のメンバーは、北海道、山形、東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、愛知、大阪、京都、兵庫など日本の各地で計 66 回の公開シンポジウムや公開講演会を実施した。本領域主催の公開シンポジウムは計 2 回であり、H27 年 6 月に国立民族学博物館、H28 年 6 月にキャンパス・イノベーションセンター東京で開催した。研究成果を速やかに公開・普及し、国民との双方向のコミュニケーションを図るために領域主催の公開シンポジウム及び各研究項目の代表者が参画する公開講演会では聴衆からの質問コーナーを設け、アンケート調査を実施した。いずれの公開シンポジウム・公開講演会においても活発な対話が行われ、参加者の 95～98%程度から「とてもよかった」及び「よかった」という肯定的な回答を得た。

海外では、A04分担者の藤掛がパラグアイ国会下院から調査研究活動に対して表彰状を授与され、パラグアイ国会で招待講演を行った(H27年10月28日)。A02分担者の長谷川がニカラグアのマテアレ市議会で招待講演(H28年3月8日)、公募研究の武田がアルゼンチンのサン・ハビエル市で特別講演(H28年2月13日)、米延が在グアテマラ日本国大使館で在留邦人向けに「年縞堆積物が明らかにする地球環境変動：日本チームの最新科学プロジェクト」という講演(H27年9月11日)、A02分担者の市川がエルサルバドルのサンサルバドル市で公開講演(H27年8月28日)を行った。

(g) イベント参加・出展

イベント参加・出展は計 7 件あり、坂井らは企画展「ナスカの地上絵」山形県郷土館(H28年2月14日～3月13日、来場者 6,919 人)や山形大学人文学部附属ナスカ研究所パネル展「世界遺産ナスカの地上絵」山形県立中央病院「あおやぎギャラリー」(H27年6月14日～7月25日)に、青山は高知県立牧野植物園の企画展示「天然ゴムのできるまで」(H26年10月11日～H27年2月8日)や茨城大学附属図書館の企画展示「古代アメリカの比較文明論」(H26年11月12日～H27年3月31日)に協力した。

(h) 小・中・高向け授業・実験・実習

青山はいばらきこども大学の開校式(H27年6月20日)で 487 名の小学生に「神秘・不思議ではないマヤ文明」という基調講演を行った。本領域のメンバーは、所属大学における高校生向けの模擬授業、中高校で出前授業、寺子屋子ども大学の講演や実習、学習小学校の環境体験学習などを実施した。米延は、毎年定期的で開催される鳴門教育大学オープンキャンパスにおいて「森と文明」という演題で模擬授業を行った(H27、28年)。

6. 研究組織（公募研究を含む）と各研究項目の連携状況（2ページ以内）

領域内の計画研究及び公募研究を含んだ研究組織と領域において設定している各研究項目との関係を記述し、研究組織間の連携状況について組織図や図表などを用いて具体的かつ明確に記述してください。

(1) 研究組織(2016年6月1日現在)

X00 総括班	
研究代表者	青山 和夫(茨城大学・人文学部・教授):領域, 研究項目 A02 の総括, 研究方針の策定
研究分担者	米延 仁志(鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授):研究項目 A01 の総括, 研究方針の策定, 坂井 正人(山形大学・人文学部・教授):研究項目 A03 の総括, 研究方針の策定, 鈴木 紀(国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授):研究項目 A04 の総括, 研究方針の策定
Y00 国際活動支援班	
研究代表者	青山 和夫(茨城大学・人文学部・教授):総括及び「メソアメリカ比較文明論」分野の国際活動支援
研究分担者	米延 仁志(鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授):「古代アメリカ文明の高精度編年体系の確立と環境史復元」分野の国際活動支援, 坂井 正人(山形大学・人文学部・教授):「アンデス比較文明論」分野の国際活動支援, 鈴木 紀(国立民族学博物館・民族文化研究部・准教授):「植民地時代から現代の中南米の先住民族文化」分野の国際活動支援, 井上 幸孝(専修大学・文学部・教授):メソアメリカとアンデスの先住民世界観の比較研究, 杓谷 茂樹(中部大学・国際関係学部・教授):メソアメリカとアンデスの公共考古学の比較研究
連携研究者	八木 百合子(国立民族学博物館・研究戦略センター・機関研究員):アンデス地域(ペルー)の文化人類学研究, 生月 亘(関西外国語大学・英語国際学部・准教授):アンデス地域(エクアドル)の文化人類学
研究項目 A01: 古代アメリカ文明の高精度編年体系の確立と環境史復元	
研究代表者	米延 仁志(鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授):総括, 調査, 編年, データ解析
研究分担者	大山 幹成(東北大学・学術資源研究公開センター・助教):調査, 編年, 気候復元, 北場 育子(立命館大学・古気候研究センター・准教授):調査, 花粉分析, 気候復元, 五反田 克也(千葉商科大学・国際教養学部・教授):調査, 層序解析, 年縞編年, 那須 浩郎(総合研究大学院大学・先端科学研究科・助教):調査, 植物遺体同定, 原口 強(大阪市立大学・大学院理学研究科・准教授):調査, 航空測量, 音波探査, データ解析
連携研究者	星野 安治(奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・研究員):調査, 編年
研究項目 A02: メソアメリカ比較文明論	
研究代表者	青山 和夫(茨城大学・人文学部・教授):総括, マヤ文明の考古学研究
研究分担者	福原 弘織(埼玉大学・教育機構・非常勤講師):テオティワカン国家形成の考古学研究, 長谷川 悦夫(埼玉大学・教育機構・非常勤講師):ニカラグア太平洋岸諸遺跡の考古学調査研究, 市川 彰(名古屋大学・高等研究院・特任助教):メソアメリカ南東部の考古学研究, 嘉幡 茂(京都外国語大学・京都ラテンアメリカ研究所・客員研究員):トラランカレカ遺跡の考古学研究, 塚本 憲一郎(青山学院大学・文学部・特別研究員):マヤ文明の社会政治組織の研究
研究項目 A03: アンデス比較文明論	
研究代表者	坂井 正人(山形大学・人文学部・教授):研究の統括と考古学調査
研究分担者	松本 雄一(山形大学・人文学部・准教授):インヘニオ谷の考古学研究, 本多 薫(山形大学・人文学部・教授):アンデス文明の情報科学的研究, 伊藤 晶文(山形大学・人文学部・准教授):アンデス文明の環境地理学的研究, 千葉 清史(早稲田大学・社会科学総合学院・准教授):考古学研究の哲学的考察, 瀧上 舞(山形大学・人文学部・特別研究員):アンデス文明の考古科学的研究, 松井 敏也(筑波大学・芸術系・准教授):ナスカの地上絵の保存科学的研究, 江田真毅(北海道大学・総合博物館・講師):アンデス文明の動物考古学的研究, 山本 睦(山形大学・人文学部・助教):インヘニオ谷のベンティーヤ遺跡の発掘調査, 本多 明生(山梨英和大学・人間文化学部・准教授):地上絵の認知心理学的研究
連携研究者	阿子島 功(山形大学・人文学部・名誉教授):アンデス文明の環境地理学的研究, 米田 穰(東京大学・総合研究博物館・教授):アンデス文明の年輪年代学, 渡辺 洋一(羽陽学園短期大学・学長・教授):地上絵の認知心理学的研究, 門間 政亮(宇部フロンティア大学・短期大学部・特別研究員):アンデス文明の情報科学的研究
研究項目 A04: 植民地時代から現代の中南米の先住民文化	
研究代表者	鈴木 紀(国立民族学博物館・民族文化研究部・准教授):統括, 中南米博物館の先住民文化展示の比較研究
研究分担者	井上 幸孝(専修大学・文学部・教授):植民地メキシコの先住民歴史叙述の分析と後世への影響, 工藤 由美(国立民族学博物館・外来研究員):マプーチェ先住民組織の文化復興運動研究, 杓谷 茂樹(中部大学・国際関係学部・教授):マヤ遺跡公園整備を巡るステークホルダー間の葛藤

	に関する研究, 禪野 美帆(関西学院大学・商学部・准教授):現代メキシコにおいて再定義される先住民性の研究, 藤掛 洋子(横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授):パラグアイとパナマにおける先住民文化表象の研究, 本谷 裕子(慶應義塾大学・法学部・教授):民族衣装がつなぐマヤネットワーク研究, 小林 貴徳(関西外国語大学・短期大学部・助教):メキシコにおける無形/有形文化財の観光資源化に関する研究, 生月 亘(関西外国語大学・英語国際学部・准教授): エクアドルの先住民教育における古代文明の資源化に関する研究
公募研究	
研究代表者	伊藤 伸幸(名古屋大学・文学研究科・助教):メソアメリカ文明の高精度編年体系の確立と巨大噴火インパクトの広域比較研究
研究代表者	大森 貴之(東京大学・総合研究博物館・研究員):ワランゴ樹木年輪の同位体分析による高精度古環境復元
研究代表者	鶴見 英成(東京大学・総合研究博物館・助教):ペルー、ワヌコ市の遺跡発掘:神殿の起源を巡る編年研究と、その成果への現代的関心
研究代表者	武田 和久(明治大学・政治経済学部・専任講師):インカ帝国イメージの資源化と先住民統治:スペイン植民地期ラプラタ地域を中心に

(2) 研究組織間の連携状況

総括班のメンバーは、各研究項目の連携や計画研究と公募研究の調和を図るために以下の項目を実施した。

- ①領域全体の研究方針の策定と企画・調整: 研究組織のデータベースとメーリングリスト (ML: 総括班、各研究項目別) を採択直後に作成し、適宜更新しつつ密接に連絡を取り合った。
- ②領域における公募研究の役割と位置付けの明確化: 研究計画に関連して文明史、文化史、環境史を研究することによって、メソアメリカとアンデスの通時的な比較文明研究に資する2年間の研究を公募した。公募研究を、若手研究者による挑戦的な提案、各研究項目を連結することを可能にする研究、共通性が認められる研究と明確に位置付けて、より開かれた研究領域を目指した。その結果、4つの公募研究を採択し、メソアメリカとアンデスの両地域に目配りし、過去から現在までより広い視野をもって領域研究を進めていく体制が整った。
- ③研究活動の監督と連携の強化: 「3.審査結果の所見において指摘を受けた事項への対応状況」でも述べたように、個々の研究項目の成果のとりまとめで終わらせず、研究領域としての研究を推進、発展させていくために、総括班は領域会議として研究者全体集会を毎年度に1回主催した。計画研究の研究代表者、研究分担者、連携協力者、研究協力者、公募研究の研究代表者が研究成果を発表して議論を深め、各研究項目の連携を深めた。各研究項目間の連携をより密接かつ円滑にするために、総括班は、研究項目間の公開合同研究会を計3回主催した。領域研究の全メンバーが参加する国際研究者全体集会比べて、より少人数のメンバーが詳細なデータを含む長めの研究発表を行い、より綿密な議論を重ねて共同研究を推進できた。
- ④研究成果の総括と評価: 総括班は、計6回 (H26年7月、12月、H27年1月、H27年6月、H28年1月、H28年2月) の総括班会議を開催し、領域の企画調整、各研究項目の研究の成果や進展状況を報告し、意見交換と評価を行った。第7回目総括班会議は、H28年6月18日に予定している。総括班は、必要性に即応してウェブ会議やML持ち回り会議を開催した。個々の研究項目の活動 (調査・分析・発表など) を迅速に把握し、研究項目間の連携を強めた。そして中南米での研究項目A01調査と研究項目A02、A03の共同研究、研究項目A02、A03の共同研究、研究項目A02、A04の共同研究など、各研究項目の連携を強化して共同研究を実施した結果、効率的な領域運営を実現できた。特に日本と比べると治安が悪くスペイン語が公用語であるグアテマラとペルーにおける研究項目A01の現地調査では、長年の調査経験から現地の状況を周知している研究項目A02とA03の研究代表者の青山と坂井が、調査地の選定や現地での調査活動、さらに試料の輸出などで全面的に協力し、いずれの地域でも良好な試料を得ることができた。

7. 若手研究者の育成に係る取組状況（1 ページ以内）

領域内の若手研究者の育成に係る取組状況について記述してください。

各研究項目の研究代表者、研究分担者、連携研究者や研究協力者の大部分は、中堅・若手の研究者である。本領域研究は、国内外の共同研究者と密接に協力しながら、世界的な学術水準の国際共同研究として実施した。本領域のメンバーは、メソアメリカとアンデスの広範な地域において現地調査を実施し、国内だけでなく国外で英語やスペイン語の論文を意欲的に刊行すると共に、国内外の学会で積極的に最新の成果を発表した。その結果、4名の若手研究者が常勤のポスト、1名の若手研究者が任期付のポストを得た。本領域研究は、当該領域の学術水準を国際的に向上・強化して、革新的な人材育成につながりつつある。

若手研究者の育成（H28年6月1日現在）

常勤研究者

- (1) 吉田 明弘（研究員）：鹿児島大学・法文学部・准教授
- (2) 武田 和久（任期付助教）：明治大学・政治経済学部・専任講師
- (3) 小林 貴徳（客員研究員）：関西外国語大学・短期大学部・助教
- (4) 門間 政亮（特別研究員）：宇部フロンティア大学・短期大学部・助教

任期付研究者

- (1) 北場 育子（助教）：立命館大学・古気候研究センター・准教授
- (2) 市川 彰（ポスドク）：名古屋大学・高等研究院・特任助教
- (3) 鄭 俊介（研究員）：北海道大学・北極域研究センター・研究員

計画研究 A01 研究代表者の米延は、日本学術振興会が主催する日米先端科学シンポジウム（JAFoS）のコンビーナーから Environmental Archaeology/Paleoclimate（環境考古学・古気候）セッションの提案とコンテンツに関する相談を受けた。セッションが採択され、日米の代表的な若手研究者推薦の依頼を受け、計画研究 A01 分担者の那須浩郎（総研大・助教）と北場育子（立命館大・准教授）の参加が決定した（H28年12月2～4日開催予定）。JAFoS は次世代を担うリーダーの育成と世界をリードする人材を結ぶネットワーク形成を目的として毎年開催されている。

8. 研究費の使用状況（設備の有効活用、研究費の効果的使用を含む）（1 ページ以内）

領域研究を行う上で設備等（研究領域内で共有する設備・装置の購入・開発・運用・実験資料・資材の提供など）の活用状況や研究費の効果的使用について総括班研究課題の活動状況と併せて記述してください。

X00 総括班：領域ウェブサイトを領域代表者の青山の知人の業者に格安で委託すると共に、メールサーバを業者委託せずに自前で管理することで経費を大幅に節約した。知人の業者であるので、ウェブサイトの情報更新が迅速になる利点があった。また自前のメーリングリストを用いることで、メールでの打合せ記録を自動的に蓄積できた。

Y00 国際活動支援班：(1) 海外研究者の招聘、(2) 「アンデス地域の文化人類学研究」強化に加え、(3) 若手を含む研究者の海外派遣に関して、主に研究費を活用した。

研究項目 A01：調査では隊員輸送（ボート等）、機材の運搬とセキュリティーの確保等に本科研費を役立てて、安全かつ効率的に調査を実施できた。湖沼調査では、ボーリング機材の国外輸出には大きな経費がかかり、通関でのトラブルが想定される。また、個々の湖沼堆積物の性状に応じて装置の開発が必要である。本研究項目では日本で飛行機に手荷物預けができるように設計を工夫して基本部分を開発し、残りを現地の鉄工場等で調達することで経済的かつ効率的に調査を進めることができた。自然科学研究では対象試料に最適な装置系の開発・改良、分析試料の作成に極めて大きな時間・労力コストがかかる。南米の年輪試料の解析で必要に迫られて新規に開発した高解像度年輪画像システムでは、高額部分（カメラシステム、学内経費約 450 万円で購入）に既存学内設備を援用することで、安価に高度なシステムを構築できた。科研費を使用して、同位体比測定用試料の切断装置を開発し、従来法よりも時間あたり 400 倍の生産性を得ることができた。大量試料の理化学分析では実験補佐員を雇用することで、研究者が煩雑な単純作業を繰り返すことなく効率的に実施できた。

研究項目 A02：メソアメリカ学術調査及び国内外における成果発表に必要な経費などに関して、研究費を効果的に使用した。諸遺跡の発掘調査には発掘作業員、遺物の分析・整理に研究補助員が必要であり、謝金の一部をその費用にあてた。アメリカのヒューストン大学との共同研究によって、グアテマラで初めてマヤ文明の遺跡の航空レーザー測量を実施し、データを購入した。諸遺跡の測量調査のために、光波測量機（トータルステーション）やドローンを購入した。遺物の分析にあたっては、必要に応じて研究実施場所を借り上げた。諸遺跡から出土した試料の ^{14}C 年代測定を実施して、編年を精密化した。遺物の産地同定のためにハンドヘルド蛍光 X 線分析計を購入して現地に持ち込み、マヤ考古学では 1 遺跡当たり最も多い 5,375 点の黒曜石製石器の産地の同定に成功した。メソアメリカ考古学の関係図書は、毎年最新の図書を購入し、有効に活用した。

研究項目 A03：アンデス学術調査及び国内外における成果発表に必要な経費に関して、研究費を使用した。ナスカの地上絵の現地調査、インヘニオ谷の踏査調査、ベンティエラ遺跡の発掘調査には、考古学調査員、発掘作業員、遺物の分析・整理に研究補助者が必要であり、謝金の一部をその費用にあてた。なお村落遺跡調査及び地上絵の学際的研究のために、ナスカ台地と周辺部において航空レーザー測量を実施した。遺跡から採取した自然遺物、考古遺物に関して、 ^{14}C 年代測定を含む化学分析を行った。

研究項目 A04：研究費の主な支出費目は旅費である。研究代表者及び分担者が合理的な経路と日程を考慮しながらメキシコ、グアテマラ、パラグアイ、チリ、ペルー、エクアドル、アメリカ合衆国に渡航し、フィールドワークと資料収集を行った。物品としては、研究資料の整理のためのパーソナルコンピューター 7 台と関連部品、カメラ一式、及びメキシコ・チリ・パラグアイ研究に関連する書籍を購入した。その他に各研究者の必要に応じて調査助手や調査協力者への謝金、資料輸送費、車両借り上げ費、印刷費、文房具等の消耗品費を支出した。

9. 総括班評価者による評価（2 ページ以内）

総括班評価者による評価体制や研究領域に対する評価コメントを記述してください。

立命館大学・古気候研究センター・センター長・中川毅 専門：古気候学

領域全体については、評価者の理解が必ずしも細部にまで及んでいると言にくい部分もあるが、おおむね計画通りに進行しているとの印象を受ける。文理の壁を越えながらの野心的な共同研究であることを考慮すれば、グループ間の理解の醸成が進みつつあり（メンバーとの個別の交流からそう感じる）、複数の研究項目にまたがるアウトプットも出始めていることは積極的な評価に値する。

研究項目 A01 については、いくつかの特筆すべき進展があった。まずグアテマラのペテシュバトゥン湖から、9m を超える完全連続の年縞堆積物コアが採取された。この試料に対しては、年輪年代学の手法を適用することで、誤差のない年代軸が構築されつつある。また XRF スキャナを用いた超高解像度分析が行われ、マヤ低地帯における環境変動の動態と動因を解明する素地は理想的に整った（要約してしまうとニュアンスが失われるが、これほどのクオリティでコアを採取し、これほどの丁寧さで深度と年代を管理しきったこと自体が賞賛に値する）。今後、同コアから得られるであろう知見は、世界の最先端事例になることが強く期待されるため、その意義を評価者の視点から改めて強調したい。なお上記のコアはマヤの歴史全体をカバーするには不十分な長さであったが、GPB-vib のコアがこれに代わる物として採取されて過去 3000 年分の分析に供することができるため、当初計画の遂行に大きな支障はない。

セイバルにおける赤色立体地図の作成、ナスカ台地におけるワランゴ・エスピーノの現生木の標準試料作成、また木材と堆積物コアの両方に用いることのできる高解像度撮像システムの開発は、研究の根幹部分にかかわる初期の成果として評価できる。具体的な応用例はまだ示されていないが、プロジェクトの開始から実質的に 2 年未満の進捗状況としては極めて健全であり、今後の進展に期待感が広がる。

アリゾナ大学・人類学部・教授・猪俣健 専門：マヤ考古学

研究班毎に極めて重要な成果が上がっている上、その成果が既に発表・出版されつつあり、各研究者の努力を大きく評価できる。それぞれの研究は世界的にみても最高水準にあり、権威のある学術誌に発表された成果は国際的に大きな評価を得るものと思われる。しかし、研究成果の主なものとは班毎の個別研究によるものであり、プロジェクト全体の学際的研究協力の成果は一般向けの書籍の出版に限られている。今後、プロジェクト全体として国際的な評価を受ける成果の発表が待たれる。古気候・古環境学と考古学の学際的協力は国際的にも非常に重要になっており、当プロジェクトもその潮流に沿うものである。そのため、時代の要請にあった成果が期待される一方で、このような文理融合研究自体は特に新しいものとは言えない。このような学会の潮流を踏まえた上で、当プロジェクトの独自性をより明確に示す研究の指針と成果が期待される。

評価者の担当である A02 班のメソアメリカ研究においては、セイバル遺跡の発掘により長期にわたる居住、建築の歴史が再現され、その成果はマヤ文明研究に大きな影響を与えている。LiDAR による広域の測量も、グアテマラ考古学において最初の試みである。また、メキシコ中央部、エルサルバドル、ニカラグア、及び植民地時代の史料研究によって、総合的・包括的な地域研究となっている。これらの個々の研究は実証性の高い極めて優れたものであるが、個別研究の成果をどのように統合し、どのような比較文明論を発展させていくのかは、まだ明確になっていない。この点は、A02 班のメソアメリカ研究と A03 班のアンデス研究との比較・統括についても同様である。比較文明史的研究の成果として挙げられているものは、非常に大雑把な文明の位置づけで、プロジェクト開始以前から分かっていたことが多い。これまでの先行研究の成果を踏まえた上で、国際的な評価に耐えうる、より具体的な比較文明論の研究目標と指針が必要と思われる。

埼玉大学・名誉教授・加藤泰建 専門：アンデス考古学

領域全体の研究については、当初の目的・計画通りに着実に進展していると評価できる。本研究は文理融合の学際的比較文明研究であり、またメソアメリカとアンデスという二つの古代文明地域に焦点を当て現代も視野に入れた通時的比較文明研究である。この研究構想を実現するにあたっては、設定された4つの研究項目相互の有機的連携が不可欠となるが、この点では、総括班のリーダーシップが十分発揮され、各研究項目の代表者が他の研究項目の主フィールドに向いて意見交換を行い、調査研究の精緻化に協力すると共に、具体的な比較の分析枠組みについても実地で検討したことは大いに評価できる。

研究項目 A03 アンデス比較文明論については、精密な編年を基にアンデス文明の社会変動に関する通時的データを提供・分析して比較文明論の構築に資するという当初の目標・計画通り着実に研究を進めていると評価できる。「村落遺跡に関する総合的研究」を目指したインヘニオ谷流域調査ではインカ帝国にいたるアンデス文明の主たる展開を網羅する前5世紀から後16世紀までの約2000年間におけるセトルメント・パターンの変化を把握することができた。これは調査地の選定及び調査方法の適切性を示すものである。「ナスカの地上絵の学際的研究」については、地上絵の考古学的調査研究成果の集大成として大部な学術報告書を作成したことが重要であり、新しく発見した地上絵についての情報の他、地上絵の分類や年代的位置についての新知見、通時的変化の考察など多くの貴重な情報を提示した。この研究成果はペルー国政府文化省によって高く評価され、研究代表者坂井が所属する山形大学との間にナスカ地上絵の保護と学術研究に関する特別協定が締結されることとなった。研究項目 A03 に当初計画にはなかった地上絵保護に関する研究が追加されたのは、このように研究成果が評価された結果としての社会的要請に応えるものであり、積極的に評価したい。

大学共同利用機関法人人間文化研究機構・監事・大阪大学名誉教授・小泉潤二 専門：文化人類学

「環太平洋の環境文明史」の成果を踏まえた本研究は、対象を新大陸の二大文明に絞り、実証的かつ学際的・多面的な文明研究を進めている。年縞堆積物の採取と分析という方法により編年は高精度のものとなりつつあり、航空レーザー測量によるGISデータ解析は、発掘等と異なる新しい方法によるマッピングを可能にしている。地上絵についても新しい発見を重ね、視覚情報処理という方法でも研究が進められている。それぞれのサイトについて新たなデータが蓄積され、それらの横断的比較と分析が進められているばかりでなく、適用された新しい方法が、新大陸考古学全体、あるいはそれを超えて汎用的である点も重要である。研究成果は文明研究を代表する国際誌に発表されており、分科会の実施あるいは実施予定も、FIEALC、アメリカニスト国際会議、AAA学会など、主要な国際会議をほぼ網羅している。メディアや公開シンポジウムなどを通じた発信やアウトリーチ活動も大変活発である。

研究項目 A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」は、他の研究項目との異質性が高く、全体の統合が難しい点が審査時の指摘事項となった。これについては、1)「資源化の政治学」2)「資源化の解釈学」3)「資源の想像」という枠組みが提案されており、それぞれ 1) 古代文明を資源化しようとするアクター間の関係、2) 古代文明にアクターが見出す意味、3) 古代文明を資源化する際のアクターの想像力を問おうとしている。これは基本的に重要な方向である。本研究班がメソアメリカ地域の現代研究に偏り、この地域外また植民地時代が手薄である点についても改善が試みられているが、モノについてのデータより人の言葉や観念や行動に由来するデータを理解しようとする本研究班にとって重要なのは、個別の事例を明らかにすることに加えて、共有された焦点を明確にして共通の議論を可能とするような語彙と概念を洗練させていくことである。先住民や非先住民、また国家を含めたアクターが（現代また植民地時代あるいは独立国家形成の時代に）古代文明をそれぞれ意味付け、時には競いながら想像し絡み合う姿を描くことができれば、大変貴重な成果になると思われる。

10. 今後の研究領域の推進方策（2ページ以内）

今後どのように領域研究を推進していく予定であるか、研究領域の推進方策について記述してください。また、領域研究を推進する上での問題点がある場合は、その問題点と今後の対応策についても記述してください。また、目標達成に向け、不足していると考えているスキルを有する研究者の公募研究での重点的な補充や国内外の研究者との連携による組織の強化についても記述してください。

本領域研究は、総括班、国際活動支援班と4つの研究項目からなり、人文科学・自然科学の有機的連携の基に計画された領域融合的な共同研究である。本研究は、1) **メソアメリカ文明とアンデス文明の比較**、2) **古代アメリカ文明史と環境史の比較**、3) **古代アメリカ文明と現代の比較**という、3つの分析枠組みで比較する。国内外の共同研究者と密接に協力して、世界的な学術水準の国際共同研究として推進し続ける。本研究は、短期間で早急に成果が得られる分野ではない。考古学の発掘調査、歴史学の現地調査や文献史料の掘り出し、文化人類学の聞き取り調査や参与観察及び自然科学の湖沼ボーリング調査や自然科学的年代測定試料の収集といったハードな野外調査を実施した後に、多種多様な資料・史料・試料の室内分析及びデータ解析に多くの時間と労力を要する。5年間継続して共同研究をコツコツと続けていき、地道に研究成果を残していきたい。国外で英語やスペイン語などの論文をより一層意欲的に刊行し、国内外の国際学会で最新の成果をさらに発表する。本領域の研究成果を国内外に積極的に発信し続けていくことによって、当該領域の学術水準を国際的に向上・強化していく。

研究項目が連携して行う具体的な研究計画としては、(1)文明史と環境史の統合、(2)メソアメリカ文明とアンデス文明の通時的な比較研究、(3)「古代アメリカの比較文明論」の現代的意義の探求が挙げられる。H28年度後半から、総括班が指導的な役割を果たしつつ、各研究項目で明らかになった自然科学(A01)、考古学、歴史学、文化人類学等(A02～A04)の成果を精査し、本領域の大目標である古代アメリカの比較文明論の新たな展開のために、基礎データの整備を開始する。研究計画(1)については、精密な自然科学的年代測定法、湖沼年縞堆積物・樹木年輪試料を用いた高精度の環境史復元、グアテマラとペルーの航空レーザー測量による遺跡のGISデータ解析という研究項目A01、A02、A03の共同研究によって、(1)いつ、なぜ、どのように、メソアメリカとアンデスの諸社会が変化したのかについて、環境変動との因果関係を検証する。研究計画(2)については、研究項目A02、A03の共同研究によって、メソアメリカ文明とアンデス文明の諸社会の変化に関する事例を権力、王権、農耕、牧畜、戦争、政治、経済、イデオロギーや人口変動などに関して多面的に比較し、多様な対処方法を明らかにする。研究計画(3)については、これらの成果と研究項目A02、A03、A04の共同研究の成果を基に導かれる歴史的教訓と文明研究の今日的意義を探求する。メソアメリカとアンデスに散在した自然環境共生型社会(あるいは自然環境破壊型社会)、資源循環型社会(あるいは資源非循環型社会)、強い(あるいは弱い)回復力(レジリエンス)をもつ社会の実像を提示し、現代社会に向けて発信することが、本領域研究の今日的意義の一つといえる。古代アメリカの諸文明の成功事例を知り、逆に失敗事例から歴史的教訓を学ぶことによって、現代社会が持続可能な発展を遂げ、危機を回避するための鍵となり得るのであり、未来のシナリオの選択に役立つ。またA04が示しつつあるように、現代の中南米の人々は政治・経済・社会的な諸課題に対処するために古代アメリカ文明に関する知識を資源として活用しようとする関心が強く、本領域研究の成果は大きな注目を集めると予想される。彼らの興味や期待を正しく認識し、本領域研究の妥当性を絶えず自問することで、研究成果の着実な社会還元や研究対象地域への貢献に結びつけていくことが可能となる。本領域研究は、よりバランスの取れた「真の世界史」の構築に大きく貢献し、文明とは何か、人間社会の共通性と多様性について、旧大陸の「四大文明」及び西洋中心的な人類史観では得られない新しい文明史観・視点・知見を提供していく。

総括班は、研究項目間の連携をより密接かつ円滑にするために、研究項目間の公開合同研究会を積極的に開催していく。総括班は研究成果の発表及び刊行に際して全面的な責任を負い、関係者専用のウェブサイトを設け、成果物(データ、図版等)の領域内での共同利用を促す。総括班は、成果物の公開を領域関係者全員に積極的に促す。特に定量的データ(¹⁴C年代や環境復元結果等)、写真・図版については論文等を出版後、継続する研究への支障が認められない限り、適切な公開データアーカイブ(例えばNOAA National Climatic Data

Center)に提供し、領域内外での共同利用に活用する。研究項目A01の堆積物試料については計画期間終了後、本領域以外の研究者に利用を呼びかけ、元試料からの追試・検証を可能とする。当初計画通りに進まない場合の対処としては、総括班は各研究項目の実施状況を常に監視し、支障が見られる場合は、メーリングリストを通じて速やかに報告し、問題点の所在を協議する。計画研究の研究代表者は必要な場合には総括班会議を招集し、対策を講じる。特に本領域では中南米で多数の現地調査を実施するため、事故が起こらないように万全の対策を講じると共に、犯罪被害・疾病等に対して予防策及び案件発生時の対処法をできる限り想定しておく。また傷害保険や査証取得などに関して、領域メンバーに適切な措置と助言を行う。領域研究の目標達成に向け、不足していると考えているスキルを有する研究者の公募研究としては、メソアメリカとアンデスの植民地時代の歴史学者を重点的に補充していききたい。

研究項目A02、A03、A04の研究者の協力を基に、メキシコ、グアテマラ、アルゼンチン、アメリカの国際的に評価の高い海外研究者をH28年10月に招聘して、日本で初めてのメソアメリカ研究者国際会議を東京で開催する。招聘を受け入れた海外研究者は、ロドリゴ・リエンド(メキシコ、メキシコ国立自治大学・人類学研究センター・教授)、コンセプション・オブregon(メキシコ、メキシコ国立人類学研究所保存・修復・博物館部門・研究員)、エドガル・カルピオ(グアテマラ、サン・カルロス大学歴史学部・教授)、フローリー・ピンソン(グアテマラ、サン・カルロス大学歴史学部・講師)、クレメンティーナ・バットコク(アルゼンチン、メキシコ国立人類学研究所歴史部門・研究員)、ジェフリー・ブラスウェル(アメリカ、カリフォルニア大学サン・ディエゴ校人類学部・准教授)などである。こうした国際的に評価の高い海外研究者と連携して、領域の研究組織を強化していく。メソアメリカ研究者国際会議で発表した研究成果を青山とロドリゴ・リエンドを編者とするスペイン語研究書としてメキシコ国立自治大学からH30年度に刊行する。本領域研究の研究成果の中間報告として、古代学協会の学会誌『古代文化』の特輯「古代アメリカの比較文化論の新展開」に同協会の編集協力委員である青山を編者として、H29年3月と6月の2回にわたって研究項目A01、A02、A03、A04の研究者が執筆する計13本の論文を刊行する。総括班は、H29年度後半に、領域全体としての出版計画を策定する。H31年度に出版する領域研究の成果をまとめた一般書と研究書(論文集)の原稿をH31年2月までに集め、編集する。

領域代表者をはじめとする総括班のメンバーは、今後さらにリーダーシップを発揮して、領域として研究計画を推進し続ける所存である。本領域では研究成果の社会還元に特に力を注ぎ、知の再生産が効果的に行われるように努める。そして、先スペイン期のアメリカ大陸の歴史に関する学術研究と一般社会のもつ知識の隔たりを埋めるように努力し続ける。総括班は、研究成果の社会還元のためにインターネットのウェブサイト(鳴門教育大学内に設置)で情報を発信する。また研究成果の社会還元のための公開シンポジウムを原則年1回ほど開催する。総括班は、研究成果に関する記者会見を行うと共に、マスコミへの報道等に関する情報のコントロールを行う。本領域では研究活動における不正行為の防止に関して研究集会等を利用して適宜、啓蒙活動と監視を行い、これが万が一発覚した際には関係機関と協力して厳正に対処する。またいわゆる利益相反マネジメントに関して、関係諸機関のポリシーを参照しつつ、その遵守を領域全体に呼びかける。

本領域の中心メンバーは中堅・若手であり、本領域研究を推進することによって、当該領域における革新的な人材育成に繋げていきたい。常勤のポストを得る若手研究者が複数出てきたのに加えて、多くの若手が国際的なレベルの研究の重要性を再認識したのは大きな喜びである。こうした中堅・若手の研究者が、新規の研究プロジェクトの企画・申請に中核的な役割を果たし、当該学問分野や関連分野に大きなインパクトや波及効果を与え続けることによって、21世紀の古代アメリカの比較文明論の国際的な学術水準の更なる向上・強化と人材育成につながるように本領域研究を推進していきたい。